
近代お伽草紙

転寝猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近代お伽草紙

【Nコード】

N9732L

【作者名】

転寝猫

【あらすじ】

『めいばくそう』へようこそ。

この館は悩める客人さまのため、様々な占いをご提供しております。訪れる客人さまも様々。街の皆さん、異人さんに、化人さま…果たして今日は、どんな客人さまがいらつしやるのでしょうか？開国してちよつとくらしいの日本を舞台にした、ちよつと不思議な物語。どうかごゆるりと、お楽しみくださいませ。

第一話　まずは自己紹介から…

めいぼくそうへようこそ、と申し上げると、大抵の客人さまは怪訝な顔をなさいます。

と、申しますのも。

「あの看板…『めいぼくそう』と読むんですか」

このお店の看板は、どうやら常連の客人さまにしか読めないらしいのです。

聞くところによれば、街の皆さんはうちのお店のことを、『占い屋敷』とか『杏珠さまの館』とか…色んな呼び名で呼んでいらつしやるそうです。

そんなわけなので。

姐さま方の所へお連れする前に、こうやって客人さまに店の名の由来をご説明してさしあげるのが、私の日々のお仕事になっております。

『明衣埚珀荘』の名は、占い全般を表す『命・ト・相』を文字つたものです。

当てられた字にも、それぞれ意味がございまして。

『明衣』は神事の際に着る衣、『埚』は薬を調合するつぼ、『珀』は貴い白玉…

つまり、私共の館でご提供する占いやお祓い、薬の調合に因んでいる…というわけです。

ここまで説明すると、大抵の方はほう…とため息をつかれます。

私が名付けたわけではないのですが…そんな風に感心されると、何だか誇らしい気持ちになるのです。

「申し遅れましたが」

私は裳の裾をちよつと摘み、異国風にご挨拶をしました。

「私、この館で占い師の見習いをしております…夢、と申します」

この館には、二人の占い師がおります。

津都美姐さまと、美古都姐さま。

つづみ姐さまは、捜し物や商いに関する占いを得意とされており。
みこと姐さまは、恋占いや薬師のお仕事を得意とされております。
皆さまのお求めに応じて、姐さまの所へお通しするのが館の決まりごと。

「杏珠さまは…占いはなさらないので？」

首を傾げる客人様に、にっこり笑ってお答えします。

「杏珠さまは、姐さま方では難しい占いや、お祓いなどをなさるんですが…特殊な道具を遣うため、料金が少し…割高になっております。」

「そう………ですか」

その時です。

館の離れから聞こえてきたのは………誰かの悲鳴。

目を丸くしている客人さまに、ちよつと失礼…と微笑んで。

私は一目散に、姐さまの部屋へと向かいました。

駆け付けた先では。

「ぬしは…自分が何をゆーちよるか、分かつとるのか!？」

いつも通りに威勢の良い、つづみ姐さまの怒声が響き渡っていました。

「ひっ…すっ………すいませんっ………」

何だ何だと集まっていた客人さまや街の皆さんをかき分け、姐さまのお傍に駆け寄ります。

「夢！こいつを摘みだせ！……」

一体どうなさいました？と…お尋ねしましたら。

つづみ姐さまは、大きな目を倍くらいの大きさに見開いて、青くなっている客人さまを指差して…叫びました。

「この男、このわしに今晚付き合えなんぞと…」

「で…ですから………もしよろしければって………」

反論しようと口を開いた客人さまに、姐さまは鬼の形相で迫ります。
「よろしいわけないじゃろ！！ぬしゃ一体、何を勘違いしとるん
じゃー!?」

姐さまは真っ赤な顔で、占い道具を手当たり次第、客人さまに投げ
つけています。

あーあ…

あんな事したら…後で杏珠さまに叱られてしまうのに。

「た…たすけてっ…………たすけてくださいっ
すると。」

ちよつと失礼、失礼…と人ごみをかき分ける、女性の声が聞こえて
きまして。

姐さまの顔がひくひくひくつと…引きつりました。

「警察の者です。何か騒動のようだ…通報がありました」

半ば腰を抜かしている客人さまは、あたふたと女性の背中に隠れま
す。

女性は、もう大丈夫ですよ…と微笑み、客人さまを他の警察の方に
お任せして。

くるりと私達の方を振り返り、明るい声でおっしゃいました。

「事態は丸く収まりましたので、どうか皆さんご安心ください」

毅然とした彼女の声には、いつも惚れ惚れさせられます。

先程入り口からお連れした客人さまは、どうやら帰ってしまわれた
ようで…

静かになった部屋には、彼女と私と姐さまだけが残りました。

不貞腐れた様子のつづみ姐さまは、書斎机に頬杖を突き、ぷいっと
そつぽを向いています。

ご面倒お掛けしました…と深々頭を下げると。

「いいのいいの、これは私のお仕事だから」

夕月ゆいづさんはにっこり笑ってくださいました。

「相変わらず、夢ちゃんは礼儀正しいのね。それに引きかえ…」

彼女はふう…とため息をついて、厳しい声でつづみ姐さまを叱ります。

「あなたは何なの！？つづみ…いい年して、軟派の一つもあしらえないなんて…」

つづみ姐さまは彼女の方を見ずに、不機嫌そうな顔のまま。

ぽつり、とつぶやきました。

「ぬしだけには…言われとうないわ」
すると。

ゆづきさんは顔を強張らせ…声を詰まらせます。

「……………何…ですって？」

……………あら。

何だか、怪しい雲行きです。

ちつ…と小さく舌打ちをして、つづみ姐さまはじろりとゆづきさんを睨みます。

「だから、ぬしのように…色気のかからも無うて、男から一声も掛からんようなおなごに言われとーない、と言うとるんじゃっ」

「…あ…なた…ねえ、私の何を知ってるっていうのよ！？私にだってそいつた殿方の一人や二人……………」

引きつった顔で睨むゆづきさんと、ほう…と好戦的なつづみ姐さまの視線がぶつかります。

「例えば…誰じゃ？」

「……………それは」

「…言えんのじゃろ？」

「……………そっ…そんな…そんな私の勝手でしょ！？何でそんなことあなたに話さなくちゃならないのよ！？」

ふっ…と意地悪く笑い、姐さまは勝ち誇ったように髪をかきあげました。

「あーあー相変わらず口だけは達者じゃのー…女だてらに男のような格好をして、^{いかめ}厳しい顔をして街を歩きまわっておっては…ぬしの『良い話』が聞ける日が来るのは、一体いつのことじゃろーなあ」

「……………うるさいなあ！！ほつといてよ！！！」

ゆづきさんは、警察のお仕事の傍ら、街の道場で子供達に剣術の指南をなさっています。

道場にはきちんとした先生もいらっしやいますので、お手伝いなのだそうです。

優しくて明るい性格のゆづきさんは、街の皆さんの人気者です。

黒い軍服の男性の警察官の方と違い、薄桃色の着物に紺色の袴姿、紺の紐で長い黒髪を後ろで結わえたその姿は麗しく、私はいつも羨ましく思ってしまうのですが…

つづみ姐さまは、彼女のそういう姿を…いつもこんな風にかかわれるのです。

……………そうそう。

今はそんなことを考えている場合ではありませんでした。

二人の間を流れる、一触即発の空気に…おろおろ周囲を見回していると。

戸口から、のんびりした声が聞こえてきて。

「何やの？二人して騒々しいなあ」

二人はぎよつとした顔で、声の主を見つめます。

「つづみ。姉弟子のあんたが怖い顔してるから…夢、困ってるやない」

「いえっ…みこと姐さま、私はその……………」

ええよ、と笑って、みこと姐さまは小さく首を傾げ。

翡翠色の耳飾りがちゃりん…と音を立てました。

「ゆづきもゆづきや。あんたがそないな小さいことに腹立てたりするから、この子も調子に乗るんやないの」

「そっ…それは……………」

ゆづきさんは耳まで真っ赤になって、硬直してしまいます。

「ええから早よ詰所に戻り。皆さん心配してはるえ？」

「でっ…でも……………」

「そんなこと、ぬしには関係なかるうが」

ばそつと呟くつづみ姐さまに、はつとした顔でゆづきさんが同意します。

「そつ…そうよ！これは私とつづみの問題で、みことには関係…」

「大ありや」

そんなこと言うまでもありません…という顔で、みこと姐さまは二人の攻撃をひらりとかわしてしまいました。

不満そうな二人をよそに、歌うような声は続きます。

「あんたらがそうやって罵り合ってるの、外にも聞こえてるんやから…」

ふう…と大げさにため息をついて、みこと姐さまは腰まである長い髪を、ゆっくりと掻き上げました。

「おかげさんで占いに集中出来ひんくて…私も困ってんねんで？」
そして。

一時の…沈黙の後。

こほん、と軽く咳払いをしたゆづきさんが、気まずそうに笑いながらおっしゃいました。

「じゃ、じゃあ私はこれで…また何かあつたら呼んで頂戴ね、夢ちゃん」

いつもの調子に戻ったゆづきさんに、はい！と元気にお返事いたします。

………が。

彼女はちらり…とつづみ姐さまを見て。

「………覚えてなさいよ、つづみ」

低い声でつぶやいて…館を出ていかれました。

その後もしばし、部屋には重い空気が漂っておりまして。

むつつり黙りこんだまま、煙管に火をつける…つづみ姐さま。

「…さてと」

みこと姐さまは、不機嫌な姐さまにお構いなしという素振りで、ぱ

ちゃんと両手を叩きます。

「夢、お仕事に戻るか？」

「…あつ……………はい！」

つづみ姐さまはこちらを振り返ることなく、机に肘をついたままひらひら手を振っています。どうやら…未だご機嫌斜めのご様子。部屋を出て、ぴかぴか光る廊下を少し歩いたところで。

「あの…みこと姐さま？」

「…何？」

つづみ姐さま大丈夫でしょうか？と…お尋ねしますが。

相変わらず…みこと姐さまはにこにこ笑っていらつしゃいました。いいのいいの…と、乳白色の指輪の光る白い細い右手をひらひら振って、穏やかな調子でおっしゃいます。

「あの子、へそ曲げたら誰が何言っても聞かへんし…ほつといたらええ」

「…そうでしょうか」

「そ。だからあんたも気にせんと、自分のお仕事したらええよ。忙しいやろ？」

「……………はい、まあ」

…まったく。

本当に…対照的な二人の姐さまです。

麗らかな陽だまりの中に、いづこさんの笑い声が響き渡ります。

「そつかそつかあ…」

「いづこさんつ、そんな…笑い事じゃありません」

姐さま方に聞こえたら大変、と焦る私にはお構いなしで、ゆづきとみこととつづみの三つ巴なんて…と、いづこさんは目を細めました。

「みんな大人気ないんだから…ほーんと夢ちゃんは大変だ」

不意に顔が熱くなるのを感じ、私は地面に視線を落とします。

「私なんて…まだまだ未熟者ですし」

「そんなことないない。俺、夢ちゃんが一番しっかりしてると思う」

けどなあ」

「そんなことは…」

ときどきしている私の背後から。

「うちの見習いを誑かすのは止めてくれないかねえ、師範代？」

低い声が聞こえてまいりまして……………思わず、体を縮めてしまいました。

「あ…」

いづこさんは慌てた様子で立ち上がり、焦ったように笑います。

「いえ、杏珠さま！俺はその…」

「仕事サボリに来てるのはお見通しなんだよ、いづこ。夢はお前さんと違って暇じゃないんでね。そろそろお帰り願いたいんだが？」

「あつ…とお……………じゃあ…そろそろお暇しよっかな！？じゃあね夢ちゃん！またっ」

「えっ！？……………はい」

お気をつけて…と手を振る私と、眉間に皺を寄せて腕組みをする杏珠さま。

いづこさんは小走りでお店を出たところで、くるりとこちらを振り返ります。

「そうそう！言い忘れちゃうところでした」

「…なんだい？」

「杏珠さま、今日もお綺麗ですねっ」

きよとんとした顔の杏珠さま。

「やつぱり『美人揃いの占い館』の女主人だけあります。いつもお綺麗で…」

「…さつさとお行き」

はあい、と気持ちの良い返事を残して、いづこさんは道場へ帰っていかれました。

ふん、と呆れたように鼻を鳴らして、杏珠さまは私の顔をちらりと見ます。

「夢」

「…はい!？」

「仕事に戻りな」

「……………はい!」

頭を掻きながら奥へと戻っていく杏珠さまの後ろ姿を見送りながら。
私は…大きなため息を一つつきました。

そうそう。

いづこさんは、市宮いづこさんといって、街の剣術道場の師範代を
なさっている方です。

若いながらになかなかの腕前だそうで、街の坊や達の人気者なので
す。

……………ですが。

いづこさんは、もっと…街の娘さん達に人気があるようで。

さらさらの髪に、抜けるような白い肌。

すらりとしたお姿は、まるで物語の中に出てくる牛若丸のよう。

それでいて、あんな風に気さくなお人柄ですから…

若い女性が放っておくはずありません。

ただ……………

ちよつとだけ…軟派な所をお持ちなのが、玉に瑕です。

杏珠さまのことも、お話しておかねばなりません。

杏珠さまは『めいぼくそう』の主人で、私達のお師匠様です。

お年のほどは…はつきり分かりません。

ですが、お前のおつかさんのおつかさんくらいの年だよ…と、以前

つづみ姐さまがこっそり教えてくださったことがありました。

髪は確かに真っ白ですが…そんな風には正直、見えません。

いづこさんの仰る通り、杏珠さまはずっと背筋が伸びていて、瞳に

は強い光が宿っていて。

それはそれは、美しい方なのです。

でも……………

それはそれは…怖いお方でもあります。

第二話 環さんのお話

箒で店先を掃いていたら、ふと。

お店の前を何度も何度も通り過ぎる、一人の男性の姿が目に残りました。

『いいかい、夢』

杏珠さまのお言葉が、脳裏を過ぎります。

『占いというものは、医師にも学者にもお役人にもさじを投げられて、縋るものが何一つ無くなった人間が…最後の最後に縋るものなんだよ。だから…』

いち、にい、さん…

私の前を通った回数を、指を折りながら数えてみます。

再び、私の目の前を通り過ぎる、少し擦れた着物の男性。

これで…とお。

「あの…何かお困りですか？」

『店の前を十回往復する人がいたら、奥にお通し下さい』

それが、杏珠さまの教えなのです。

目を丸くして男性は、店の前から立ち去ろうとなさいます。

慌ててその方の腕を両手で掴み、私はにっこり微笑みかけました。

「私達占い師は、お困りの方をお助けするのが仕事…お代はいつでも結構ですので、お話だけでもして行かれませんか？」

出されたお茶をずずずと一気に飲み干して。

男性は感極まった様子で、つづみ姐さまを見ました。

「……………夜逃げえ!？」

素っ頓狂な声を出す姐さまに、声が大きいです!と、人差し指を立ててご注意ください。

環さんとおっしゃるその男性は、真剣な表情でこくりと頷きました。
「いかにも。夜逃げにいい日を教えていただきたい」

いつもは陽気で強気なつづみ姐さまが…救いを求めるような目で私を見ますが。

私にはただ…首を傾げることしか出来ません。

もつとも、私は見習いで占いはまだまだ出来ませんので…

首を傾げるより他、為す術はないのでした。

いつになく歯切れの悪い声で、つづみ姐さまは環さんに尋ねます。

「夜逃げに……日取りも何も……無いような気がするが」

「やり直したいのです、人生を」

「…やり直す？」

そう、と頷いて立ち上がり、環さんは両拳を握り締めます。

「はい！私は悪い友人に騙され…高利な借金を背負わされてしまいました。ですから…新しい土地で家内と子供三人と…生まれ変わった気持ちでやり直したいのです！…！」

そんな日はありませんか？と…目を輝かせて尋ねる、彼の勢いに押され。

つづみ姐さまは困り顔で、磨きあげられた水晶玉に目を遣ります。

私も、横から覗き込んでみるのですが…

残念ながら、未熟者の私には何も見えません。

立て膝をついた姿勢で、んー…と低い声で唸る、つづみ姐さま。

どうでしょうか？と、環さんは姐さまに迫ります。

「そう…だな」

「はい！」

「しいて……言えば」

その時。

「ちょっとお待ち！」

低くて綺麗な杏珠さまの声が、薄暗い部屋に響き渡りました。

目を丸くする環さんをちらりと見て、姐さまは眉間に皺を寄せます。

「何か……？」

「その客人…私に任せなさい」

「……………杏珠さま」

姐さまは、何か言いたげな表情。

…不思議です。

だって、困ったお客人を杏珠さまが引き受けて下さるというのに。どうかなさったんですか？とお尋ねしようと思ったのですが…

「夢」

杏珠さまの凜とした声に阻まれ…それは叶いませんでした。

「は…はいっ」

「客人を…私の部屋までお連れしなさい。私は先に行っているよ」
「はい」

杏珠さまの言いつけですので、ひとまず考えごとは中断。

環さんを伴って、つづみ姐さまの部屋を後にします。

「……………夢？」

背後から、遠慮がちな姐さまの声。

「…何ですか？」

「あの……………やっぱいいわ。行きな」

「……………はい」

杏珠さまの部屋には、白檀の香りがかおりが充満していました。

杏珠さまは占いの時、いつもそのようになさるのです。

黒い薄絹の天蓋がかかった、暗い杏珠さまのお部屋に、環さんは少々緊張していらっしやるみたいです。

「客人どの、何をしておられる？早くこちらへ来られぬか」

奥から杏珠さまの低い声が響き、環さんは何か救いを求めるような目で私をご覧になりますので。

私はにつこり笑って部屋の中に進み、環さんを奥へと誘いました。数本のろうそくの明かりに照らされた部屋の奥で。

杏珠さまは環さんに、ご自身の目の前の座布団に座るよう指示なさいました。

ごくり…と唾を飲み込んで、環さんは杏珠さまの言葉に従います。

すると。

杏珠さまは突如身を乗り出し、環さんの顔をじっと見つめました。瞳の奥の奥まで、ずっと見通すような眼差し。

ひ…………と、環さんは小さく悲鳴を上げます。

「これ客人どの、顔を背けるでない。それではきちんと占えぬではないか」

「はっ…………はい」

環さんは意を決した様子で、杏珠さまの顔をじっと見つめ返しました。

『顔相』というのも、占いの中にはあるのですが、杏珠さまの得意とする占いは、それともまた違っておりまして。

瞳を見てその人の過去を知り現在を知り、未来を知る……というものです。

杏珠さま曰く、人の悩みも苦しみも、そしてそれらを解決する術も、全て瞳の光に現れるのだそう。

ただ、そういった占いはあまり広く知られておりませんので。

「占い館の杏珠さまは、眼光鋭く人を睨みつけ、飲み込んでしまうそう」

なんて…………

不名誉な噂が流れることも、ままあります。

真剣な表情の杏珠さまと、強張った顔の環さん。

二人の奇妙なならめっこは、そのまましばらく続きまして。

「…………環どの、とおっしゃったか」

杏珠さまが口を開き、やっと長い沈黙は破られました。

「…………いかがでしょうか!？」

焦ったように尋ねる環さんを制し、杏珠さまはさらりとおっしゃいます。

「環どの。申し訳ないが……今はまだ、占いの結果を伝えることは出

来ぬ」

「……………では、いつならばお教えいただけるのです!？」

切羽詰った表情の環さんに、杏珠さまはにっこり微笑みかけられました。

「まあ、明日の朝…といったところかの。今宵はこの館に泊まり、ゆるりと休まれよ。そうじゃ、奥方達もこの館に呼ばれるといい」

……………杏珠さまが、こんなことをおっしゃるなんて。

私の知る限りでは…初めてです。

腑に落ちない顔の環さんをよそに、杏珠さまはすつと立ち上がり、私の名前をお呼びになりました。

「夢？」

「はい」

「そんなわけだから…ご一家のため、部屋を一つ用意しなさい。そうそう…奥の空いている広間、あそこを使つといい」

「……………はい」

「あの男をこの館に泊めるだとお!？」

つづみ姐さまは、目を丸くして叫びました。

「夢つ…それは一体どうということじゃ!？」

「一体…つて……………杏珠さまがそう…」

「……………杏珠さま…か」

額に手をやり、はあ…とため息をつく、つづみ姐さま。

「あのお方は本当に…何をおっしゃられるやら、分かったものではないなあ」

「……………あの…つづみ姐さま」

何がそんなにいけないのですか?と…私は思い切ってお尋ねいたしました。

すると。

さつき同様困り果てた目で、姐さまは私の顔をちらりと見て。

じきにわかる…と、つぶやきました。

環さんご一家と一緒に夕食をとっておりますと。

不意に、館の扉をものすごい勢いで叩く音が…聞こえてまいりました。

子供達は一斉に環さんに取りすがり、奥さんは怯えたように体を縮ませています。

「……………借金取りです」

低い声で環さんがおっしゃいます。

「私を追って来たのでしょうか…杏珠さま、やはり私達はこちらに泊めていただくわけには」

「夢？」

「…はい！」

杏珠さまは環さんの言葉を遮るように、私に声をかけられました。

「あいつらに言っておやり…ここに、お前さんらの探している人間はいないとね」

……………え？

「私が……………ですか？」

そうそう、と…手を口にあて、小さくあくびをしながら杏珠さまは頷いていらつしゃいます。

「私やつづみ達が出張っていったら、仰々しくて如何にも何か隠している風じゃないか。まだ人通りもある、何もこわいことはないさ」

「いえ…それには及びません」

環さんがじつと…私の目を見ます。

「いいんです。元はといえば、逃げようなんて考えた私がいけないのですから。夢さんを危ない目に遭わせるわけにはいきません」
奥さんの胸でしくしく泣いている子供達に目をやり。

環さんは寂しげに微笑みました。

「大丈夫。きつと…なんとかかります。ですから夢さん…ここは私が」

「……………環さん」

戸を叩く音は、止む気配がありません。

ふう、と大きなため息をついて、環さんは立ち上がります。

奥さんは不安そうにその背中を見つめており。

怖い顔をしてお茶碗を見つめているつづみ姐さまと、柳のような静かな佇まいでお茶を啜るみこと姐さま。

杏珠さまは、試すような目をして…私を見つめていらっやいます。
…どうしよう。

でも……

表へ出ようとする、環さんの背中に向かって…私は大声で叫びました。

「いけません！…！」

そして。

すうつと息を吸い込んで、環さんの肩を掴みます。

「駄目です！まだお子さん達も小さいのに、こんな風に毎日毎日、怯えて暮らさなきゃならないなんて…」

きっと環さんご家族は、ずっとこんな風に取り立て屋に追われ、怖い思いをしてこられたのでしょうか。

それに比べれば、一回あの人達を追いつ返すことなんて…何でもないことです。

そうすれば、きっと…

杏珠さまが、環さん達を助けくださるのですから。

夢さん、駄目です、危ないです…という環さんを奥の部屋に押し込んで、私は…

重い館の扉を開きました。

扉の前に立っていたのは、大きな男の人でした。
しかも…三人。

背中をひやつと…冷たい汗が流れます。

縮み上がりそうになる背すじを…ぐつと伸ばして。

私はにっこり微笑みました。

「あの…何か御用ですか？」

「…出してもらおうか。あの男を」

「……………は？」

「ここで匿っているのはわかっておるのだぞ！？」

「…おっしゃっている意味が、よく……………」

「しらばつくれるでない！！！」

野太い怒鳴り声に、思わずぐつと目をつぶります。

「娘、貴様我々を謀るつもりか！？環という男はここにおるのであるう！さつさと出さぬとひどい目に遭うぞ！！！」

「で……………ですから」

こわい。

どうしよう。

でも……………

さつきの環さんご一家の姿が、ふつと脳裏をよぎります。

楽しそうな笑顔と…怯えた子供達と、疲れきった様子のご夫婦と。そうしたら。

お腹の底から、何か熱いものが込み上げてくる気がしました。

「ここにはそんな方、いらっしやいません！」

突然口から飛び出した言葉に、自分でもびっくりしてしまいます。とはいえ。

言えた自分に、ちょっとだけ…ほつとしながら。

私はもう一度、男達に向かってぴしゃりと言い放ちました。

「よろしいですか！？私共の務めは客人さま方の占いをして差し上げること。客人さまを匿うことは、占い師の仕事ではございません！」

不意打ちに目を丸くする男達を指差して、大きく息を吸い込み。私はきつぱりと、言い放ちました。

「おわかりになりましたら…どうぞお帰りください」

その一連の出来事は私にとって…それはそれは大きな冒険でありまして。

部屋に戻って残りの夕食を掻き込み、後片付けをして、部屋に戻って明かりを消すと…

どっと…体の力が抜けてしまいました。

ぼんやりした頭で目を瞑ると…瞼の裏に、鮮やかな色彩が浮かびあがります。

赤、青、緑…花火のような、万華鏡の中を覗いたような、美しい文様が次から次に現れては消え。それは描きとめる間もない、一瞬の出来事です。

いつも不思議に思うのです。

これらの光は一体…どこから現れて、どこへ消えて行くのでしょうか。杏珠さまがいつもおっしゃるように、『物事は須らく意味を持つ』のであるなら…この光にも、何か意味があるのでしょうか。

この世の全ての事象の意味を汲み取り、お伝えするのが占い師の仕事…と言います。

私も一人前になったら、色々な事が見えるようになるのでしょうか。望むと望まざるとに関わらず…

でも、それは……

少し、怖いことです。

その時。

柔らかい何かが、ひやり…と額に当たりました。

「きゃっ……………」

慌てて布団から起き上がると…みゃあ、という呑気な鳴き声。

「もう…びつくりするじゃない、美都^{みと}」

「…みゃあ」

みとは杏珠さまに拾われて、私よりもずっと長くこの館で暮らしています。

そんな訳で、勝手知ったるこの館を、我が物顔で闊歩している…というわけ。

「どうしたの？」

「みゃあ」

冬場の寒い時期ですと、こんな風に布団に入れてくれというように、おでこや肩を突かれることはよくあるのですが…

みとは長い尻尾を振りながら、私を部屋の入口へと誘います。

「ちよつと…みと？」

板張りの廊下に、みとのかちやかちやという爪の音だけが響きます。そして…そのまま縁側へ。

しなやかに跳躍し、白い砂利敷きの庭に降り立つ…みと。

一体……私をどこへ連れて行こうというのでしょうか。

と…その時。

今までご機嫌そうな声を出していた彼女が。

突然…背中 of 毛を逆立てました。

そして。

………何かの…焦げるような臭い。

「……………大変」

目を凝らすと、離れた所の垣根が…煙を上げておりました。

ぞおつと背筋が寒くなり…

私は思わず…叫びました。

「火事！！！！姐さま、杏珠さま、火事です！！！！」

幸いなことに被害は小さく、火は庭先の木々を少し焦がした所で消し止められました。

煤けた木肌に手をやり、杏珠さまがおっしゃいます。

「この程度なら大丈夫、幹の中心には被害はないからね…枯れてしまふことはないだろう」

ほつとする私の後ろで、でも…と、ゆづきさんが眉をしかめます。

「火付けに大丈夫も大丈夫じゃないもありませんからね…一体誰が

こんなこと」

「それを調べるのが…おぬしら警察の仕事じゃろ」

欠伸をしながらつつみ姐さま。

むっとした様子で、ゆづきさんが姐さまを睨みます。

「つつみ…何か心当たりないの？この館に恨みを持つような人」

「さあなあ」

「…あなたねえ」

「…………お、そういえば」

どきっとして姐さまを見つめてしまいますが。

姐さまは依然、呑気な声でおっしゃいます。

「あれだ、あの…昼間の助平野郎」

「…………もういいわ」

あなたに期待した私が馬鹿だった…とため息をついて、ゆづきさんは警察の方々を引き連れて帰って行かれました。

静まり返った館の庭には、杏珠さまと姐さま二人、そして私とみとの四人と一匹だけ。

しばし沈黙が流れた後。

「さあて」

杏珠さまがぱちんと手を叩きます。

「後はゆづきに任せて、我々はもう休もうじゃないか。明日も朝から仕事だからねえ」

「…………杏珠さま……！」

それは…

さっきまで、ゆづきさんの問い掛けにのりくらりと答えていた…

つつみ姐さまの、怖い声。

「…なんだい？つつみ」

「杏珠さまはまだ…あの家族を匿いなさるのですか！？」

何も答えない杏珠さまに、つつみ姐さまが迫ります。

「何もかも分かっただいでおいでなんでしょう！？あの環という男」

「…つづみ姐さま、一体何が」

「あの男にはとてつもない凶相が出ておる…私なぞには到底被いきれぬほどの、な」

「……………何ですって？」

方違えに、清めの札…何とかあの家族を迫る不幸から救い出すことは出来ないものか。

つづみ姐さまは一生懸命考えたのだそうです。

「だが…私の手には負えなかった。凶の力が強すぎて、周囲の人間も巻き込まれてしまう。現に……………」

さっきの…火事？

私は、ふいに背筋が寒くなるのを感じました。

このままでは…と、姐さまは拳を握っておっしゃいます。

「我らも、あの家族の道連れになつてしまします。早く彼らを館から遠くへ…もうそれしか方法はありません」

「…つづみ」

「人里離れた所へ逃がせば、少しは彼の不幸を薄めることも出来ましょう。一難去つた今なら、おそらく災難が降りかかることもない」

「つづみ？」

「ですから、杏珠さま」

「おやめと言つてるんだよ、つづみ！」

杏珠さまの厳しい声が、宵闇の中に響きわたります。

「そんなに大きな声を出しては…中の客人に聞こえてしまうだろ」
夢、と…杏珠さまがふいに私の名を呼びました。

「お前はどう思う？」

「私…ですか!？」

かあつと…顔が熱くなります。

「私…その……………まだ…占いも出来ませんし」

「占いのことを言ってるんじゃない。お前自身の意思を聞いているんだよ」

「私は……………」

答えは、もう…決まっております。

「この館に災難が降りかかるかもしれない、としても…私には、環さん達を追い出すなんて、とても出来ません」

厳しい声で、つづみ姐さまがみこと姐さまに尋ねます。

「お前は…どうだ？」

「私……………」

きよとんとした顔をして。

穏やかに微笑んで、みこと姐さまはつづみ姐さまを見つめ返しました。

「つまり…私があんたの味方したらええ、いうこと？」

ぱつと顔を赤くして、つづみ姐さまは唇を噛み、俯いてしまわれました。

そんな姐さまに…杏珠さまは穏やかな調子でおっしゃいます。

「お前は少々…目先の事にとらわれ過ぎているようだね」

「…目先の事？」

やれやれ、とため息をついて。

杏珠さまは頭を掻きながら、館の中へ戻っていかれました。

「私の言葉の意味が分からぬうちは、つづみ…お前もまだまだ未熟。そういうことさ」

その夜。

つづみ姐さまが、ご自身の部屋に戻られることはありませんでした。夜更けにふいに目が覚めて、私がそつと部屋の襖を開けてみますと…庭の大きな石に腰掛け、じつと垣根の外に目を向けた、つづみ姐さまの姿があつたのです。

さらに…外が明るくなり、朝餉の支度に起き出した私の前にも。

同じようになさっている…姐さまの姿がありました。

「姐さま…？」

お声を掛けますと、私に気づいていたらしい姐さまは、黙って片手を上げて応えてくださいます。

「お休みに…ならなかったんですか？」

遠慮がちに…お尋ねしますが。

姐さまは答えず、夢…と、私の名をお呼びになりました。

「…何でしょうか？」

「お前には…何か見えたか？」

「……………え？」

「あの……………環という男だ」

真剣な表情のつづみ姐さまに、思わず慌ててしまいます。

「いえっ…だって…昨夜の火事も、みとが私に教えてくれたんです、それに……………私はまだ…未熟者ですし、何も……………」

「…そうか」

悪い、と…つづみ姐さまは優しい笑顔でおっしゃいました。

「変な事を訊いてしまったな。まあ、お互い未熟者同士…頑張るか」

「…はい」

つづみ姐さま……………

もうそろそろお昼の支度を…と思っていた矢先のことです。

店先で、客人さま達が騒いでおられるのに気づき、急いで向かってみますと…

そこには…昨夜の男達。

「…また、いらっしゃったのですか？」

どきどきしながらお尋ねしますと、当然だ！と…低い声で怒鳴ります。

「ここに匿われているのは分かっている！今日こそは出してもらうか、あの男…」

「ですから…」

「…この館、火付けがあつたようだな」

はっとして…頭から、すうっと血の気が引いていきました。

ざわざわしている客人さま達や街の皆さんをよそに、男はいやらしく笑って私に耳打ちします。

「昨夜は大事にならず済んだようだが…またあのようなことが起こらぬとも限らぬ。悪いことは言わぬから、あの男…こちらへ渡した方がお前達の身のためだぞ?」

「………なんて…ひどい。」

体の芯から力を振り絞って…かすれた声で答えます。

「あまり…身に覚えのないことばかりおっしゃるようですと…杏珠さまを呼びますよ?」

「おお!そうするがいい。お前のような小娘を通すより、その方が話も早かるう」

「で…では」

その時。

「夢さん!!!」

館の奥から聞こえてきたのは…

環さんの声でした。

環さんはじつと男の人達を見据え、静かにおっしゃいます。

「もう…逃げも隠れもしない。だから…夢さんや杏珠さま達を危ない目に遭わせるのは…もう、やめてくれないか」

「…何だ。やつぱりここにいたんじゃないか?なあお嬢ちゃん」

「………環さん」

彼は私に向かって微笑み、小さく頷きました。

「これ以上ここにいて、皆さんにご迷惑をお掛けするわけには参りません」

「…でも」

「いいんです。本当にお世話になりました」

昨夜は借金取りに怯えることなく、家族でゆっくり夕餉の食卓を囲むことが出来た。

そして、子供達の安らかな寝顔を見ながら、安心して眠ることが出来た。

それもこれも杏珠さまのお陰だと…環さんは深々頭を下げられまし

た。

「皆さんのご恩…一生忘れません」

………そんな。

館の奥に目をやると、つづみ姐さまとみこと姐さまが、奥さんと子供達を庇うように立ち、こちらの様子をじっとうかがっておられました。

そして………

一番奥で、何もかも見透かすような静かな眼差しで…皆を見つめる杏珠さま。

私は環さんご一家の為に、何もしてあげられないのでしょうか…

私達のやり取りをにやにや笑いながら見ていた、三人の男達。

その中の一人が愉快そうな様子で、殊勝な心がけ中々結構…と呟きます。

「だが、さっきの『危ない目に遭わせる』とかいうのがちと…解せんな」

「…何だと!？」

「この館に火を付けたのが…まるで俺達のような口ぶりだったじゃないか」

「そんなの…お前達がやったに決まっている!」

真つ赤な顔で怒鳴る環さんに、ぐいっと顔を近づけ…男は下品に笑います。

「まるで見てきたようなことを言うが…貴様、俺達が火をつけるところを見ていたとでも言うのか?」

「…それは」

「何か…証拠でもあるのか?」

「……………」

「だったら…そんな決めつけたような言い方は、あまりに失礼つてもんじゃねえか」

大笑いする男達に、顔を歪める環さん。

と……………

「証拠なら、ここにありましてよ？」

街の皆さんをかき分け、現れたのは…

「ゆづきさん！？」

「こちらの方…」

街の立ち飲み屋のご主人をちらりと見て、ゆづきさんはにやりと笑います。

「昨夜、あの時間帯に…あなた方が館の傍を立ち去る所、見てらっしゃったそうですわ」

「……………何だと！？」

「それも、こちらのご主人だけじゃありませんの。お店にいらっしゃったお客さんも、あなた方に間違いないって」

呆然とした顔で、そんな…と呟く男達。

ゆづきさんの隣に警察の署長さんが立ち、厳しい声で他の警察の方を呼びます。

「連行しろ！」

「ま…待て！俺達は…」

「あなた方の罪状は…それだけではございませんのよ？」

腕組みをして、ゆづきさんが男達をじっと見据えます。

「あなた方は金貸しを生業にしてらっしゃったようですが、その金利、期限、取り立ての方法…全て、法律の定め反しています」

「……………何！？」

「ですから…どうか、ご同行を」

ゆづきさんは厳しい顔で男達に言い放ち。

私の方へ視線を向け…にっこり微笑んでくださいました。

暴れる男達を手慣れた様子で拘束し、警察の方達は詰所へ戻って行かれました。

街の皆さんや客人さま達も引き上げ、静かになった館の中で、ゆづきさんが、明るい表情で私達をご覧になります。

「皆さんのおかげで、悪徳高利貸し一味を逮捕することが出来ました。ありがとうございます！」

あの男達が、悪い方法でお金を貸していること…警察の方々は以前から薄々感づいてらっしゃったのだそうです。

「ただ、証拠といった証拠がなくて。そんな中で…昨夜の不審火です。つづみ？」

「…なんじゃ」

「あなた昨夜『犯人探しはお前達警察の仕事』って言ったでしょ？それで私、つづみをあつと言わせてやろうって、俄然やる気出ちゃってさ。徹夜で証拠探して早朝から聞き込みに回って…めでたく犯人をお縄に出来たってわけ！おまけに、高利貸しの証拠までつきちゃって。本当あなたには感謝してるわ！あくまで今回に限ってだけだねっ」

清々しい顔で笑うゆづきさんに、けっ…とつづみ姐さまが悪態をつきます。

「人を嫌がらせるために頑張る、とは…本当にぬしはいい性格じゃないの」

「……………まあ…今日のところは聞かなかったことにしてあげる」

「あの…ゆづきさん」

眉を顰めるゆづきさんに、恐る恐る伺います。

「環さんは、その…どうなるのでしょうか？」

彼女はにっこり笑って、環さんご一家をご覧になりました。

「環さんのご友人に掛けられた借金自体、そもそもちゃんとした手続を踏んだものじゃありませんし、法外に高い金利を除いたら、きちん返済も済んでらっしゃいます」

「…じゃあ」

「勿論、もう借金取りに追われることはありません。どうか、ご安心なさってください」

一瞬、沈黙が流れ。

環さんの奥さんは、口元を押さえ…肩を震わせて泣き出しました。

お母さんのそんな姿に、不思議そうな顔をする子供達。

環さんは愛する家族を抱きしめ、涙ぐんで杏珠さまにおっしやいます。

「ありがとうございます…これで…私達は平和に暮らすことが出来ます」

「はて。では…例の日取りの件はどうなさるのかね？」

ああ、と…環さんは困り顔で笑います。

「それならばもう…必要ありません」

「ほう…そうかいそうかい」

「お代ですが、今すぐにとは参りませんが、近いうちに必ず…」

「ああ…それならば必要ない」

杏珠さまは何気ない素振りで、ひらひら手を振っておっしやいました。

「こちらも、占いの結果を伝えてこそその商売だからね…客人に何も提供していない以上、お代を頂戴するいわれも無いさ」

はつとした顔をして…環さんは深々と頭を下げられました。

「本当に…本当に…ありがとうございます。ご恩は…一生忘れません」

私も…傍らのみこと姐さまと、顔を見合わせて笑います。

本当に…よかった。

『私も、早く一人前の占い師になって、環さんのような方を助けて差し上げたいです』

几帳面な文字の並んだ夢の日誌に目を通し、ふう…とため息をつく。見上げると、今日は綺麗な満月だ。

「つづみ？」

軒下からひよこつと顔を覗かせたのは…みことだ。

「あんた、またそんな所で…」

「…うるさいのお」

悪態について煙管をふかすと、白い煙が月明かりの空にふわりと浮

かび、消えた。

みことは軽い身のこなしで屋根に上り、私の隣にしゃがみ込む。

「今日は…綺麗なお月さんやね」

「…そんな所、じゃなかったのか？」

「あら。私はええんや」

…何じゃ、それは。

「あんたゆうべ寝てへんのやし…下手にここで転寝でもして、転がり落ちたら事やと思て」

「……………ほっとけ」

今朝、夢に思わず訊いてしまったこと…

みことにも、この際だから訊いてみることにする。

「ぬしには…何か見えたか？」

「私……………」

大きな目を不思議そうに見開いて、明るい満月に視線を移す…みこと。

「私に見えたんは…火付けのことくらいやったけど」

「火事……………みこと、気づいてたのか!？」

「まあ…えらい薄ぼんやりした感じで、昨晚かどうかはつきりせえへんかったけど」

「みとをけしかけたのは…ぬしか」

思わず身を乗り出した私に、まあな…と笑う。

「『何かあるかも知れへんし、見回り嚴重にしといてな』って、声かけといたくらいやし…あの子が起こしに行ったんも夢やったやろ？だから実質、何もしてへんようなもんや」

……………そう言えば。

「まあ…あんな夜更けにたたき起こされて、ちゃんとついていってやるのは、律儀な夢くらいのものだから…みとの判断は至極当然でとこだろう」

「あら…慰めてくれてんの？」

「…馬鹿者。そんなんじゃない」

あんたも、と…私の煙管を取り上げて、ふう…とふかしてみことが言う。

「今回は難儀やったわね」

「……………」

「私…別にあんたが意地悪で言っただとは思ってへんよ？あんたはただ…この『めいぼくそう』を守りただけや」

…慰めてくれてるのか。

「言いにくいこと、ちゃんと杏珠さまに進言して…立派やったと思うけど」

杏珠さまには…全てお見通しだったのだろうか。
それに……………」

「夢は…知らず知らずのうちに、何か感じ取っていたのかもしれないと…思っただが」

「さあ…どうやらな」

煙管をくわえ、ふう…と白い息を吐くみこと。

「……………血筋、か」

まあそれはわからへんけど…とつぶやいて、髪をかきあげ立ち上がる。

「あの子に、天性の才能があるのは…確かなんやない？」

「…なんだ？それは」

「お節介」

ふふふ、と肩をすくめて笑い、みことは私に手を差し延べる。

「そろそろ降りよか？早く寝ないと美容に悪いし」

「…そうだな」

白い華奢な手を握り、私は屋根瓦の上を歩き始めた。

お節介……………か。

みことに気づかれないように、俯いてひっそり笑う。

確かに…夢のあれは天性のものだ。

あいつは果たして…どんな占い師になるんだろう。

いずれにせよ…

「なあ、みこと」

「何？」

「私達も…悪い手本にならぬ程度には、頑張らねばなるまいな」

「…あら。随分と殊勝なこと言うんやな、つづみ」

くすぐったそうに笑う彼女の顔が青白い月明かりに照らされ、水晶の耳飾りがきらりと光った。

夢も呼んでやれば良かったな。

本当に今日は…いい月夜だ。

第三話 桜の季節のお話。

街は一面、春景色です。

「ええ気候になったなあ」

穏やかな陽の光に目を細め、気持ちよさげにつぶやく、みこと姐さま。

天井に向かって大きな欠伸をして、つづみ姐さまは気怠い声を上げています。

「今日は開店休業じゃな」

そう。

麗らかな春の休日、『めいぼくそう』には閑古鳥が鳴いていました。私は頷いて…そうだ！と小さく手を打つてみます。

「お花見に行きませんか！？今日はいいいお天気で、桜も満開ですし

…」

一瞬瞳を輝かせたものの、すぐに渋い顔になって、だが…とつづみ姐さまがぼやきます。

「杏珠さまは…何とおっしゃるかの」

「そやねえ…杏珠さま次第ってところかしら」

「……………そうですね」

三人顔を見合わせ。

つづみ姐さまの表情も、きりつと引き締まって。

日向ぼっこをしていたみとが、みゃあ…と一つ欠伸をしました。

「じゃーんけーん…」

歌うようなみこと姐さまの声が響き。

「ぼん！！！！」

勢い良く出された、三人の手。

勝敗は……………一目瞭然でした。

やーった！と指を鳴らし、つづみ姐さまは私の肩をぽん、と叩きま

す。

「じゃあ夢、頼んだぞ！」

「……………私…一人で行くんですかあ？」

「まあまあ…夢、杏珠さまに弛んでるって叱られてもしたら、二人で慰めたげるから」

にこにこしている二人の姐さまに、思わず愚痴がこぼれます。

「お二人とも…私は何出すか、読んでらっしゃったんでしょ？」

意味深な笑みを浮かべ、みこと姐さまは唇に指を当てました。

「そやねえ…まあ、占い師やし、私達」

「そーそ。分が悪いの承知で乗ってきた夢が悪かる」

「…もう！姐さま達の意地悪！！！」

がちがちに緊張して訪れた杏珠さまの部屋からは、一本の古い桜の木が見えました。

「…花見だつて？」

「……………はい」

桜は今を盛りと咲き誇り、淡い桃色に染まっています。

「今日はお客さまもいらっしゃいませんし…」

「…そうだねえ」

『桜ならここにもあるじゃないか！』と…怒鳴られるのではないか
と思ったのですが。

杏珠さまは予想外に、にっこり笑っておっしゃいました。

「まあ、いいだろ。明日には天気も崩れそうだし…三人で行っておいで」

「…よろしいんですか！？」

ああ…と頷く杏珠さまは、とってもご機嫌なご様子。

やはり春の陽気と桜の威力はすごい…と、思わず感心してしまします。

「では…行って参ります！」

杏珠さまのお気持ちが変わる前に…と、ぺこりと頭を下げ、お部屋

を辞した私の背中に。

夢、と…お声が掛かりました。

「…何でしょうか？」

「『桜切る馬鹿』という言葉を、聞いたことがあるかい？」

『桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿』

桜は古枝ほどよく花をつけ、梅は新しい枝ほどよく花をつけるのだとか。

以前、みこと姐さまに伺ったことがあります。

でも……

一体何故、そんなお話をなさるのか。

不思議に思いながら頷く私に、杏珠さまはにやりと笑っておっしゃいました。

「いいかい、夢…何か困ったら、物事をひっくり返してみるのも大事だよ」

桜並木の河原は、大勢の花見客でこった返していました。

桜舞い散る、長閑な昼下がり。

ほろ酔い大人達と、はしゃいで駆け回る子供達。

敷物を広げて、軒をかいて寝ている中年の男性を眺め、つづみ姐さまがため息をつきます。

「やれやれ…風情も何もあつたもんじゃないな」

「…そう？これはこれで、ええもんやない」

ゆっくり髪を掻き上げるみこと姐さまの言葉に、私も同意して頷きます。

こんなに街の皆さんののんびりしてらっしゃる光景、なかなか見ることは出来ません。

何と申しまして、『めいぼくそう』を訪れるお客さまは多くが悩みを胸に秘め、暗い顔をされていますから…こういう風景を見ると、何だかほっとしてしまうのです。

呆れ顔で私達も見て、つづみ姐さまは頭をかきました。

「ぬしらは…どうもお人良しじゃのう」

私にはそうは思えない、とつぶやいて、姐さまは桜の下を歩き始めます。

「あ、待つてください！つづみ姐さま！」

頭上に広がる桜色の世界。

お腹の底から嬉しくなって、足取りはどんどん軽くなります。

こんなに素敵な春の日。

きつと今日みたいな日は、みんな辛いことも悲しいことも忘れてしまふのでしよう。

悩んでる人なんて、きつと今日は一人も……

「夢ちゃん？」

ふいに掛かった声に振り返ると、そこには…

小さな坊やの手を引く、ゆづきさんの姿がありました。

心底困り切った様子で、眉間に皺を寄せています。

「どうか………なさったんですか？」

「…それが」

ひゅーと口笛を吹いて、つづみ姐さまが可笑しそうに尋ねます。

「なんじゃ？そのちび助………まさか、お前の隠し子か？」

「馬鹿！…！そんなわけないでしょ！？」

鬼の形相で怒鳴るゆづきさんに、坊やは…堰を切ったように泣き出しました。

「あつ…あら？」

周囲の人が驚いた様子で立ち止まり、私たちを不思議そうに見ています。

ゆづきさんは顔を真っ赤にして…懸命に坊やをあやします。

「ねえ…急に怒ったりしてごめんなさい…だから…ね？ご機嫌直してよお…」

ゆづきさんの困り果てた姿を見て、けらけら笑うつづみ姐さまを…
今度は私とみやこ姐さまが、呆れ見つめる番でした。

はあ、と大きくため息をついたゆづきさんの傍らで、大声で泣いている坊や。

どんなに宥めすかしてあやしてみても、泣き止む気配はありません。どうしたものか…途方にくれはじめた、その時です。

坊やの小さな身体が…ふわりと宙に浮きました。

「…え？」

「よし、これでどうだあ」

いづこさんがにこにこ笑って、坊やを高く抱き上げます。すると。

坊やはぴたりと泣き止んで、楽しげな歓声を上げ始めました。

「……………いづこ」

呆然とつぶやく…ゆづきさん。

「男なら、そんなに泣いてお姉さんを困らせちゃ駄目だぞ」

いづこさんが優しい眼差しで、諭すように言い聞かせますと。

坊やは、うん！と明るい声でうなずきました。

ほお…と感心した様子でつぶやくみやこ姐さまに同意して、私は大きく頷きます。

いづこさんって…すごい。

坊やは桜並木の下で、迷子になって泣いていたのだそうです。

道場に敷かれた布団で、すやすや寝息を立てる坊やをちらりと見て…ゆづきさんはまた、困ったようにため息をつきました。

「おうちはどこ？お父さんとお母さんは？って聞いても…あの子、何も答えてくれないんだもん。どこから来たの？って聞いたら…」
彼女は、窓の外の桜の木に目をやります。

「…あれ」

「…何じゃ？」

「桜の木！何か…桜指さしてさあ……………あっちあっちって言うんだもん。私困っちゃって」

……桜の木。

そうかそうかと頷いて、いづこさんはいたずらっぽく笑います。

「それにしても意外だったなあ……ゆづきって小さな子供苦手なんだね」

不本意そうに、ぐっと眉を寄せるゆづきさん。

「……だつて」

「みことあたり、子供あやすのなんて朝飯前って感じるけど……駄目だなあ、みんな」

いづこさんの笑い声に、ちょっとだけ傷ついて……

私は、道場の板張りの床に視線を落しました。

「そんなもん、出来る必要がないじゃろ」

口を尖らせるつづみ姐さまに、いづこさんは愉快そうにおっしゃいます。

「まあ、今はそうかもしれないけどさ。みんなそんなんじゃ、お母さんになった時大変だぞお」

う……と、絶句して凍り付く、つづみ姐さまとゆづきさん。

そして、やや不快そうにこめかみを引き攣らせ、みこと姐さまが静かに笑いました。

「お母さんになる予定なんて……しばらくないし?……お生憎さまや」

眠っている坊やをいづこさんに託し、ゆづきさんはお母さん探しに出掛けていきました。

私達も彼女のお手伝いをしようと、道場を後にします。

そして……

「あの……つづみ姐さま?」

遠慮がちに声を掛けた私を……

姐さま達は、目を丸くして見つめました。

「なんじゃ、夢……気づいてたか」

「あら、感心……あんたも成長したんやなあ」

私は、みとを連れて来なくてよかった……と思っていたのです。

みとがいたらきつと……

あの子に噛みついて、余計に泣かせていたでしょうから。

「化人さまの子供ですよ、あの子」

ふむ、と腕組みをするつづみ姐さま。

「ゆづきの話から察するに……ありや、桜の子なんじゃろな」

「桜の……精ですか？」

「ああ、おそらく……間違いなかるう」

「……こんな陽気やしなあ」

咲き乱れる桜を見上げ、みこと姐さまは憂鬱そうにため息をつきました。

「ついうっかり、こんな真昼間に……親とはぐれて出てきてしもたんやろけど」

「お母さんの所へ帰してあげる方法……ないんでしょうか？」
うーん……と、小さく唸って。

つづみ姐さまは、胸元から首飾りを取り出しました。

先端には、占いに使う水晶玉をうんと小さくしたような透明の石。

これはつづみ姐さまお手製の、持ち歩き出来る水晶玉なのです。

陽の光に照らしながら、何か呪文を唱えるつづみ姐さま。
ですが……

眉間に皺を寄せたまま、しばらく考え込んだ後。

「駄目っ」

途方にくれた様子で、姐さまは大きく首を振りました。

「何も……見えへんの？」

「映るのは……あれ」

紅色の石がついた指輪の光る白い指で、姐さまが指し示す方向を見ますと。

「桜の木………ですか」

じゃあ……あの子がゆづきさんに言ってたことは、やっぱり本当だったのね。

「どないする？ やっぱし、杏珠さまに相談した方がええやろか？」

「そうじゃなあ……」

深刻な表情のお二人に……私は恐る恐る、尋ねます。

「あの……」

「なんじゃ？夢」

「あの子が、桜の化人さまの所へ帰れなかったとしたら……何か、良くないことでも起こるのでしょうか？」

難しい顔で天を仰ぐ、つづみ姐さま。

「まあ……はつきりとはわからぬが」

「どこかに……ひずみは出て来るやるね」

ひらひら舞い散る桜の花びらを手のひらに受けとめ、みこと姐さまがつぶやきます。

「あの子探して……桜が季節の移ろいの、止めてしまふ可能性もあるし」

「……と、おっしゃいますと？」

「桜は春を保とうとして……咲いて咲いて、力の限り咲き続けて……」

狂ったように咲き続ける、桜の花が脳裏に浮かびます。

目眩を起こしてしまいそうな、その想像を打ち切るように……

みこと姐さまは物憂げな瞳で私を見つめ、手のひらの花びらを……ぱつと宙に放りました。

「……………」

「もし、そうになったら……桜は……一斉に枯れてしまふやるね」

「……………そんな」

「ああ……自分の命を使い果たしてしもつてな」
同意するように、つづみ姐さまも低い声でつぶやきます。
そんなこと……………

大変だ。

「探しましょう！」

突如叫んだ私を……

姐さま二人は、目を丸くして見つめています。

「だってそんなのっ…あの子も化人さまも可哀想すぎます！それにっ…街の皆さんは毎年、桜が咲く季節を楽しみになさってるんですよ！？だからっ…………早くあの子を、お母さんの所へ帰してあげなくちゃ」

「けど…………どうやって？」

みこと姐さまの問い掛けに…言葉を失います。

呆れ顔の姐さま方に、照れ笑いをして…

私は頭を掻きました。

「やはり…………杏珠さまにご相談するのが…一番ですねっ」

ところが。

館に戻ると、杏珠さまの姿はどこにもありませんでした。

代わりに、お部屋の机には

『出掛けてくるので留守番頼む』

という…置き手紙が。

杏珠さまの達筆が走る薄い和紙をひょいと摘んで、ふむ…とつつみ姐さまが唸ります。

「どうやら…春の陽気が、杏珠さまの悪癖を呼び覚ましてしまったようだの」

杏珠さまは時々、こんな風にふらりとお出かけになるのです。そして、風の向くまま気の向くまま…いつお戻りなるかは、きつとご本人すらご存知ないのでしよう。

「困ったなあ…どうしたもんやろ」

ぎゅっと眉をしかめ、みこと姐さまがおっしゃいます。

「すぐ…お戻りになるといいんですけど」

ところが…というか、案の定というか。

杏珠さまはなかなか帰って来られませんでした。

ゆづきさんのご苦労も空しく、坊やはおうちに帰ることが出来ず。

桜は…冷たい雨にも強い風にも負けず咲き乱れ。

その姿はまるで、迷子の坊やがいつ帰って来てもいいように、戸口で待ち続けるお母さんのようでした。

「いよいよ…困ったことになったな」

水晶玉を撫でながら、つづみ姐さまがおっしゃいます。

私は頷いて、庭の桜の古木に目をやりました。

さすがに放つてはおけぬと、つづみ姐さまもみこと姐さまも、八方手を尽くしてくださったのですが…

「やっぱり…杏珠さまをお頼りするしかないのでしょうか」

庭の桜は、満開の中にも…どこか疲れを覗かせています。

木肌に艶がなく、花の色も褪せてきているよう。

「一刻も早く手を打たねばと思うのだが、一体…どうしたものかの」
「……………そうですね」

坊やはお母さんが見つかるまでの間、いづこさんの道場でお世話になっていきます。

ゆづきさんや私達にもすっかり打ち解けてくれ、街の子供達とも元気に遊んでいるのですが…………

時折ふと…淋しげな目をして、桜の花をみるのです。

「おうちはどこか…思い出せない？」

尋ねる私に、困り顔で首を振る坊や。

あちらこちらで、桜の木に声を掛けてみるのですが…私もまだまだ未熟ゆえ、なかなか答えてはもらえないのでした。

どうしたらいいのかしら…

誰か…一人でも良いから、桜の化人さまが私達に気づいてくれたなら。

坊やのお母さんを捜すことも、きっとそう難しいことではないはず。
……………そう。

気づいてさえもらえれば。

丁度あの頃も、桜が満開の美しい季節でした。

『夢!?!』

何をしてるんだい?と…杏珠さまが下から見上げていらっしやいます。

『女の子が木登りなんてはしたない、怪我でもしないうちに早く降りておいで』

私は答えず…せり出した太い枝にしがみつきました。

『そんな高い所にいたら、街中からまる見えじゃないか。あの子は何をしてるんだと、みんなの笑い者になってしまつうよ?』

…それでもいい。

ここにいれば…お母さんも、きっと私を見つけてくれる。

そしたら…お母さんと手をつないで、一緒におうちに帰れるんだ。

そんな風に思いながら……

私は日が暮れるまで、街で一番背の高い木の上で過ごしたのでした。あの日木の上で見た、燃えるような夕焼けは…

「…お姉ちゃん?」

坊やに呼ばれ、慌てて悲しい回想を断ち切ります。

目の前には、力いっぱい咲く桜の木々が見えます。

それも、美しいことには間違いないのですが…

街の外れにある、大きな桜の古木。

長く伸ばした枝いっぱいにはほの紅い花をつけた姿は見事で、街の皆さんもお花見の折は、その桜まで足を延ばすのが常だそうです。

長い長い年月、街の皆さんと共に春の喜びを分かち合ってきた桜の古木。

きっと…街のことなら、何から何までご存知なのでしょう。

何から何まで……

………そうだ。

「いづこさん!」

私は道場でお仕事中のいづこさんに、お母さん探しの手掛かりが見つかったことを告げ、坊やの手を引いて…桜の許へと向かいました。

空はもう、夜の訪れを告げる藍の色に染まっております。
街の外れのその場所は、人の気配もなく静まり返っております。
深呼吸をして。

まずは…一声。

「化人さま！おられるのでしたらどうかお答えください！」
いつものように、桜は黙して語る気配がありません。

ですが…落ち込んでいる場合ではありませんので。

手の届く高さに伸びる細い枝を…ぎゅっと握りしめます。

「お答えいただけないのなら…」

さぞや桜は痛がるう…と想像すると、ひどく胸が痛みますが…

ここは一大事。仕方がありません。

ちよつとだけ…我慢してね。

「これで…どうです!？」

ばきつという、痛々しい音と共に…

眩しい光が周囲を包み込みました。

堰を切ったように泣き出す…坊や。

と……

『桜を折るうつけは…そなたか?』

現れたのは…白髪の老人でした。

腰は曲がり、髭は地面につくかという長さです。

白い着物はほのかな光を放っており…

今まで幾人かの化人さまにお目にかかりましたが、ここまで威厳の

ある方は…初めてでした。

化人さまは長い髭を一撫でし、しわがれた…でもよく通る声でおっしゃいます。

『これは…誰かと思えば、坊ではないか』

「この子を…ご存知なのですか!？」

『無論じゃ。ふらりとどこかへ出掛けたまま幾日待てども戻らぬ故

…一族総出で探しておった』

と……

「お母ちゃん！」

坊やが叫んで…駆け出しました。
向かった先には。

透き通る程白い肌の…女の化人さまがいらっしやいます。

坊やをぎゅっと抱きしめると…化人さまは目に涙をいっぱい溜めて、
じっと私をご覧になり。

深々と頭を下げられました。

慌てて私も、ペこりとお辞儀をいたします。

『おぬし…杏珠の処の見習いか』

「は…はいっ」

白髭の化人さまはにやりと笑い…見事、と誉めてくださいました。

「また遊ぼうね！お姉ちゃん！！！」

今までに見たことがない楽しそうな笑顔で、坊やは大きく手を振っています。

私も嬉しくなって、笑って手を振り返しました。

「勿論！いつでも遊びにいらっしやい。でも…もう、迷子になっては駄目よ」

坊やの明るい笑い声と共に、化人さま達の姿は光の中に消えていきました。

そして……

それは、この世のものとは思えぬ…美しさだった。

満開の桜が一齐に散り…

街中が薄紅の嵐に包まれたのだ。

宵闇を照らす月明かりを受け、無数の花びらはきらきら光っており。
思わず…ため息が零れる。

「夢の奴…うまくやったようだな！」

まるで我が事のように…嬉しそうに笑うつづみ。

「つづみ、みこと、見て見て！あんまり綺麗で私…息が出来なくなっちゃいそう！」

ゆづきがはしゃいで走り出し、すかさずつづみが茶々を入れる。

「うぶな小娘のような事を言うてないわ！気色が悪い」

「…何ですって？」

「まあまあ…せっかくこんないい夜なんだから、二人もたまには仲良くしなよ」

呆れて笑ういづこに悪態をつき、つづみが私の傍に戻ってくる。

「杏珠さま…何か言っておられたか？」

「え？…いいえ。ただ、長旅はしんどうて体に堪えるて」

「そうか……」

低い声で呟いて、不意に真面目な表情になり…青白い月を見上げる、つづみ。

「ではやはり……手掛かりなし、ということか」

「…そやね」

杏珠さまの水晶玉にも映らないなんて…流石としか言いようがないけど。

「困ったもんやな…姐さんにも」

「ああ…全くだ」

まあ…困った人なのは、今に始まったことじゃないけど。

「性分なんやろな」

「………そう…皆言うがな」

ぎよつとした顔で…つづみが私の肩を掴む。

「お前まさか…良からぬことを考えとらんだろうな!？」

騒ぎを聞きつけ…ゆづきがすごい形相で走ってきた。

「みこと！駄目！」

彼女が大袈裟に首を振ると、艶のある長い黒髪がふわふわと揺れる。本人が全く気づいていない風なのは残念だが、私にはそれが…とても美しく映る。

「私絶対に許さないからね！そんなの…」

目を白黒させる、息がぴったりの二人を微笑ましく思いながら、私は小さく首を振る。

「まあまあ…私はどこへも行かへんよ」

「本当か!？」

「ええ…ほんま」

「嘘ついたら針千本なんだからね、みこと!」

「大丈夫や。だって、私がいなくなったら…あんたらの小競り合い、誰が止めんの?」

はっとした顔で…動きを止める、ゆづきとつづみ。

少し離れた所で楽しそうな笑い声を上げ、いづこが舞い散る花びらを大きな掌に受ける。

「けどさ…本当に俺達…あと何回、こうして一緒に…桜を見られるんだろっね」

はたと…言葉に詰まる。

依然花吹雪を降らせる木々を見上げる、彼の横顔は…珍しく、ひどく真剣だった。

誰も言葉を発しなくなった、穏やかな春の宵。

………そうやね。

万物は流転するのだと、杏珠さまにも何度となく…教わってきた。それは………

「そんなもの…数える必要ないじゃない!？」

突然上がった甲高い声に、驚いて振り向くと。

目を真つ赤にして佇む、ゆづきの姿があった。

「みんなどうかしてるわよ!せっかくこんなに綺麗なのに…」

「ゆづき?」

「な…のに…そんな悲しいこと…言わなくなつて」

「ゆ…づき…ごめん!俺が悪かった。急に、変なこと言っちゃって…深い意味はないんだ、本当にごめん!」

「そ…そうじゃそうじゃ!いづこが悪い!だからゆづき…」

両手で顔を覆って泣きじゃくるゆづきの髪を、優しく撫でる。

なんだか懐かしくて、胸がいつぱいになる。

ゆづきは本当に悲しそうに泣くのだ。

あの頃も、そして…大人になった今でも。

「いい年して…そないに泣くもんじゃないで？」

宥める私の声に、無言でこくりと頷くゆづき。

「私たち、ずっと一緒やったんやし…これからも…」

「……………本当？」

「なんや…まだ疑うん？」

「んーん……………ごめんね」

えへへ、と腫れた目で笑って、ゆづきは桜の嵐の中を走り出した。

「『めいぼくそう』まで競争！負けた人は明日みんなにあんみつ奢りねっ」

「お…おい、ゆづき！」

「急になんじゃそれは…」

「つべこべ言わないの！みことのんびりしてると置いてくわよー！」

「…はいはい」

思わず安堵の溜息が漏れる。

あの頃も…今も。

ゆづきはやつぱり…笑顔が一番似合うのだ。

あと何回……………か。

ま、考えてもしゃあないな。

考え事は一旦休み。

私は、春の空気を胸いっぱいに吸い込んで…
この美しい夜に、心ゆくまで酔いしれることにした。

第四話 百鬼夜行のお話

それは季節が移ろい、日差しの強くなり始めたある日の昼下がりのことです。

「何だか…今日の味噌汁はしょっぱくないかい？」

そんなことを…不意につぶやく杏珠さま。

何気ないその言葉に、ずしり…と体が重くなりました。

「あ…杏珠さま！いま夢にそんなこと言ったら…」

つぶみ姐さまのひそひそ声を遮るように、みこと姐さまが焦った様子で笑いかけます。

「夢？私は…そないなことないと思うけど」

「そっ…そうじゃそうじゃ。夢の作る飯はいつもうまいし、それに」
「…………ご馳走様でした」

私はずっと立ち上がり、姐さま方に洗い物をお願いして、自分の部屋に戻ると。

ぴしゃりと襖を閉めてしまいました。

「じゃあ…お昼からこっち、ずっと部屋に閉じこもったきりなの？
夢ちゃん…」

「しっ…………声が大きいぞ、ゆづき。夢に聞こえてしまっじゃろが」
もう…聞こえてますよーだ。

「だが…なあ」

欠伸混じりの暢気な声で、つぶみ姐さまはおっしゃいます。

「わしは、あんなこと…傷つくようなことでもないと思うんだが」
…………傷つくわよ。

昨日、久しぶりに訪れた、遠くの街の占い師さまの館。
そこで働く見習いの女の子が…いつの間にか、一人前の占い師にな
っていたのです。

年の頃も修業歴も同じくらいで、早く一人前になれるように一緒に頑張ろうね、と…お互い励まし合っていたというのに。

置いてきぼりにされた気持ちの私の目に映る、真新しい占い道具に囲まれ艶やかな着物に身を包んだ彼女は、とても…大人っぽく見えしました。

『夢ちゃんの免許皆伝はいつ?』

眩しい笑顔で尋ねる彼女に……私はただ、黙って俯くしかなかったのです。

「繊細なんだよ、夢ちゃんは」

…いづこさんだ。

「だが、こればかりは…早い遅いがあるからの」

「だから…あなたがそういう身も蓋も無い言い方するから、夢ちゃん傷つけちゃうんじゃない」

「…そうか?」

うんうん、と一緒に頷いていたいづこさん。
ふいに。

あつ、と声を上げました。

「…なんじゃ?」

「あれ…何だろ?」

「何よ、一体」

「もう、二人とも見えないかなあ!? あれだよ、あれ!」

………何だろう。

私は取っ手にそつと手をかけ、ほんの小指の先ほど襖を開いてみました。

と………

僅かな隙間にぐいつと差し入れられた手が、突然…襖を全開にしたのです。
そして。

「『天岩戸作戦』大成功！」

私の目の前には、楽しそうに笑う…いづこさんの姿がありました。
「なかなか粘ったなあ、夢。わしはもっと早くに出てくるかと思っ
ていたが」

満足げに笑うつづみ姐さまに…私は言葉を失います。

「夢ちゃん…でもね、私達、決して面白半分でやったわけじゃない
のよ？本当に夢ちゃんのこと心配で」

すまなそうにおっしゃるゆづきさんに、大丈夫です…とお答えしま
す。

「どうせ私には…神話の神様みたいに、何日も閉じこもることなん
て出来ないんですから」

何をしたって中途半端で。

何をしたっていまいちで。

こんな風では…

私は一体、いつになったら……

ぱちんという、乾いた大きな音に…思わず目を見開きます。

「夢！うじうじするのもいい加減にせぬか」

つづみ姐さまの顔が私の鼻先にぐっと近づき、優しい花の香水がふ
わっと香りました。

「よいか？一人前になるのが早い占い師もおれば遅い占い師もある。
だが…良い占い師になるか否かはまた、別の話だ」

こくり…と頷きますと。

よし！と、つづみ姐さまが気持ちの良い笑顔でおっしゃいました。

「それでこそ夢だ！他人を羨んだところで何になる。お前はお前の
良い所を伸ばすよう精進して、良い頃合いで一人前の占い師になれ
ばよい。そうすればきっと…その娘よりずっと良い占い師になれ
るさ」

「そう…でしょうか」

「当たり前だ！何と言っても…お前は杏珠さまの弟子なのだからな」

笑顔で頷く、ゆづきさんといづこさんを見ていたら…

なんだか、元気が湧いてまいりました。

まあ………いいか。

胸のどこかに、魚の小骨のようなものがつつかえているのを感じつつ…

私は笑って、姐さまに元気よく頭を下げました。

「ありがとうございます、私…頑張ります！」

お仕事でいづこさんが帰られた後も、私達はお喋りに花を咲かせておりました。

いつの間にやら、空は藍色に染まっており。

生温い風がふうっ…と通り抜けていきます。

「さて、そろそろ…私もお暇するわね」

につこり笑って立ち上がるゆづきさんに…

にやりと不敵に目を細める、つつみ姐さま。

「百鬼夜行に気をつけてな」

「…何…夜行ですって？」

姐さまの言葉に…やっぱりそうか、と納得いたします。

「百鬼夜行じゃよ、百鬼夜行。こういう湿っぽい風の吹く夕べは…

奴ら喜び勇んで出てくるからの」

「ま…まああなた、人のことからかって」

聞き慣れない言葉に一瞬動揺されたようですが、ゆづきさんは笑って手を振り、館を出て行かれました。

「大丈夫かの…あいつ」

彼女の背中に向かって…ぼつりとつぶやく姐さま。

「もう…大丈夫ですよ！百鬼夜行の化人さま方は、伝承と違って悪さんでなさいませんし。それに…普通の方に百鬼夜行は」

『見えませんもの』と………言いかけた、その時でした。

「…きゃあああ！…！」

聞こえてきたのは、ゆづきさんの悲鳴です。

慌てて館を飛び出しますと。

腰を抜かして地面に座り込む…彼女の姿がありました。

「あ……………あれ……………何？」

ゆづきさんが震える指で指差す先に目をやりますと。

大小様々なお姿の化人さま方が、楽しげに街を練り歩いていらつしやいます。

「百鬼夜行ですよ。さっきつづみ姐さまがおつしやってた…」

私も最近やつと見えるようになった所だというのに、ゆづきさんは凄いと…思いながら、そんな風にお返事いたしますと。

ゆづきさんは青白い顔で目に涙をいっぱい溜め、こちらをご覧になりました。

「何でそんなに冷静なの夢ちゃん！？こんな気味の悪いもの見て、どうしてそんなに平気な顔してられるのよお！？」

「確かに…不思議な身なりの化人さまもいらつしやいますけど…悪さはなさいませんし、愛嬌があつてかわいらしいじゃないですか？」

「……………信じらんない…あなた達占い師つて…やっぱ……………どうかしてるわ」

「相変わらずやなあ、ゆづきは」

背後から聞こえてくるのんびりした声に、振り返ると。

そこには、げらげらお腹を抱えて笑うつづみ姐さまと、みとを抱いたみこと姐さまの姿。

「みこと姐さま…？」

「昔っからこの子、変わったもんがよう見えてなあ。化人さんから幽霊さんまで…あんだだけ見たら慣れそうなもんやけど」

「さ…いきんは…見ても…見ないようにしてんのよ」
ふと…気になつて。

「みこと姐さまにも、子供の頃から見えてらつしやったんですか？」

「え？……………ええ…まあ、なあ」

ずん…と音がするほど落ち込む私に気づき、つづみ姐さまが慌てておつしやいます。

「夢、わしも…昔は見えなかったぞ！？こやつは餓鬼の時分から変わっておったのだ。なんにも気にすることはない」

「そう…ですね」

でも…つづみ姐さまは、今では立派な一人前の占い師なので、やはり…私一人、置いてけぼりにあった気持ちがいえます。

と。

「なんか…変やない？」

みこと姐さまが、怪訝な顔をなさいました。

「なんかじゃなくて、ゼーンぶ変よ」

青い顔でつぶやくゆづきさん越しに見える、化人さま方は…

確かに、以前見た時と違っておられます。

老若男女、人のお姿をされた方から、所謂『お化け』のようなお姿の方まで。

様々な化人さまが折り目正しく列をなし、気ままな夕べの散歩を楽しまれるのが、百鬼夜行の常なのですが……

今日はなんだか…皆さん所在なげにふらふらなさっているのです。

「列もあんなにばらばらで…見る、あつちでは小競り合いになっているぞ。肩がぶつかったのどのと言っておるようだが」

「…あのお化けの一体どこに『肩』があるのよ？」

「あらまあ…えらいことになってるやないの」

「先導が……」

薄暗い夜道に目を凝らし、きよろきよろ周囲を見回します。

「どこにも…見当たりませんね」

その時です。

化人さまに飛び掛かろうと、じたばたもがいていたみとが…ぴょんとみこと姐さまの腕から飛び出しました。

「こらっ、みと！」

が……

みとは、百鬼夜行とは反対の、館の中に向かって駆け出します。

「ちょっと…どこ行くの!？」

奇妙に思い、彼女の後を追いつけます。

みとの白い小さな体は、離れの納屋に消え。

「…うぎゃあああ!!!」

……………何？

誰もいないはずの納屋を、恐る恐る覗き。

私は…もつと驚いてしまいました。

「たつたつたつ…おたすけくださいっ!誰かつ」

低い声で唸るみとに怯え、小さくなつて震えていたのは…破れ提灯のお化け。

先程私が探していた…“先導”だったのです。

つづみ姐さまとみこと姐さまにじつと見つめられ…

破れ提灯は、体の中にぽつと赤い灯をともしました。

「御婦人方にそのように熱い眼差しを向けられては…恥ずかしくなつてしまいます」

「…熱い眼差しなど向けてはおらぬ。呆れておるのじゃ」

「いやまあ珍しいなあ…こんなに間近で異形の化人さん見んの、何年ぶりやろか」

「どうして隠れたりなんかしたんです?化人さま方、お困りですよ?」

「もう…そんなにいつぺんに話しかけないでくださいよ。あたまがこんがらかつてしまいます」

いやいやをするように身をよじる、破れ提灯の姿はとても愛らしいのですが…

今は、そんなことを言っている場合ではありません。

私達のいる部屋の襖が音を立てて開き、杏珠さまが入って来られました。

「どうやら奴ら、どこかへ行ってしまったようだよ。見たところ、はぐれた者はいないようだったがね」

「…そうですね」

彼は一瞬安堵の表情浮かべたものの、すぐに顔を曇らせてしまいました。

「やっぱり…ぼくなんかなくなつて、みなさんちゃんとやれるんじゃないか」

ぽつりと呟いて…

ずい、と杏珠さまの前に進み出ます。

「杏珠さまに、折り入ってお願いがございまする」

「…なんだい」

大体察しはついている…という表情の杏珠さまに、破れ提灯は目を潤ませて縋ります。

「今日…一晩だけでいいのです。ここへ匿つてはくだいませぬか？」

「一体…ぬしは何で逃げたりしたんじゃ？」

つづみ姐さまの問い掛けに、彼は…働きたくないのです、と呟きました。

「もう…何だか虚しくなつたのです。先代からこの仕事を引き継いで、かれこれ数百年やってまいりましたが」

百鬼夜行の化人さま方は、それはそれは癖のある方々なのだそうで、皆さんの我が儘を聞き、出来る限り意に添うような道を選び、気分屋なみなさんを宥めすかして並ばせて、はぐれる方がいないか後ろを振り返り振り返り…

彼の話に、あんなに楽しげな行列にそんな苦勞があつたとは…と、私は感心してしまいました。

「…でもっ！ぼくがどんなに苦勞しても…毎回文句が出るんです。先代のときはこうだった、他の先導はああだったと…嫌になつちやつたんです、ぼく」

「まあ……………」

なんだか…とても他人事には思えません。

「杏珠さま…何とかありませんか？」

杏珠さまと姐さま方は、不思議そうな目で私をご覧になりました。ぽっ…とあかりの灯った破れ提灯が、期待を込めた目で杏珠さまを見つめます。

と……

杏珠さまは私達をちらりとご覧になり、困り顔で頭をかいた後。諦めたように小さくため息をついて…おっしゃいました。

「…全くしょうがない子達だねえ。わかってるだろうが…一晩だけ、だからね」

今日一番に明るい灯を燈らせて、破れ提灯が大きく頷きます。

「はいっ！杏珠さま、皆さん…ありがとうございますっ」

……ですが。

翌日になりましたも。

その翌日になりましたも。

破れ提灯が館を出て行く気配はございません。

また、その翌日になりましたも。

「おなか痛いのでございます…」

「ぬしのどこに『腹』があるんじゃ」

呆れ顔で腕組みをするつつみ姐さまを上目づかいに見て、破れ提灯はお馴染みの口上を述べるのです。

「お願いします…あと、もう一日だけっ！そうしたら僕、ちゃんと百鬼夜行の列に戻りますから」

街は…一見しますといつも通り。平穏無事な空気が流れております。ですが……

突然、赤ちゃんの大きな泣き声が広い通りに響き渡りました。

「あらあら、どうしたのかしら…おしめも濡れてないし、変ねえ」

若いお母さんが困り顔で呟き、赤ちゃんを懸命にあやしていらっしやいます。

…それもそのはず。

破れ提灯の不在で帰り道の解らなくなってしまった化人さま方が、街をあてどなくさまよっていらっしやるのです。

「赤ちゃんには見えるんですね…化人さまが」

感心してつぶやく私に、そやねえ…と、みこと姐さまが同意してくださいます。

「子供は心がまっさらやから、きっと大人には見えへん色んなもんが見えるんやろ」

「でも…最近の子供達も怖がって外で遊びたがらないみたいですし、なんとかしてあげないと可哀想ですよ…」

「可哀想なのはこっちよ」

背後から聞こえてきた低い声に、びっくりして振り返ると。

そこには青い顔をして、目の下に大きな隈を作った、ゆづきさんの姿がありました。

「あら…」

「あら…じゃないの！こっちは大問題なのよ！」

どうなさったんですか？とお尋ねしますと、ゆづきさんは肩を落としておっしゃいます。

「最近、よく眠れなくて…」

「そら難儀やなあ」

「何か…悩み事ですか？」

「何か…って、決まってるでしょ！？あれよ、あれ！」

涙目の彼女が指差す先には…唐笠の化人さま方の姿。

あの人間達には自分が見えるているのか…と、不思議そうな表情です。

「あんなのが街中うろつろしてるって思ったらもう…悪夢よ。ある夜突然うちに上がり込んで来たら…なんて考えたら…」

ご自分の言葉に顔を青くされ、想像を打ち消すように大きく首を振って、ゆづきさんは大きなため息をつきました。

「とても…おちおち寝てられないんだもの」

深刻そうなその姿に、みこと姐さまと顔を見合わせます。

「どうやら…街で一番可哀相なのは、子供達ではなく………ゆづきさんのようです。」

「まあ………そないに心配せんでも、化人さんは人に悪さなんてせえへんし」

「…悪さしなけりやいいってもんじゃないでしょ？人の気も知らないで…」

「そうカリカリせんと…よく眠れる薬煎じたげるから、ひとまず『めいばくそう』まで来」

優しく笑うみこと姐さまに促され、ゆづきさんは渋々と頷きます。

「なんか私…ちっちゃい頃からずーっと、あなたとこんなことばかり話してる気がするわ。その度に…ああなんでみことはこんなに呑気なんだろ！？って…私いっつも思ってた」

お二人は、この街で育った幼なじみなのだそうです。

私のように『めいばくそう』で見習いをしていたみこと姐さまと、身寄りがなく道場の先生に引き取られたゆづきさん。

何処へ行くのも何をするのも一緒だった…と、いつも懐かしそうに話してくださいます。

まあまあ…と宥めるように、姐さまはゆづきさんの背中を押ししました。

「呑気なんは性分やし…ほな、行こか」

「…はいはい」

その時です。

「……………あら？」

振り返ると、さっきいらった化人さま方の姿はなく。

夕暮れに沈む誰もいない通りに、生温い風がふうっ…と通りすぎてゆきました。

みこと姐さまが薬の調合をなさっている間、私とゆづきさんは縁側でお茶を飲みながらおしゃべりをしていました。

少し元気になったご様子に安心して、訳を伺いますと。

「何故かわからないけど、ここにいたら大丈夫なんじゃないかなって思っちゃうのよね」

「大丈夫…とおしゃいますと?」

「杏珠さまもみことも、ちよつと癪だけどつづみもいるし…ここならあの化物も近づけないんじゃないかって」

「そ……………う…ですね」

……………忘れてた。

こんな所にあの破れ提灯が現れたら…ゆづきさんはきつと、腰を抜かしてしまわれるでしょう。

「ゆづきさん、私…杏珠さまにご用を言いつけられてたんでした!ちよつと…行つて来ますね!」

「…夢ちゃん?」

すぐ戻ります、と申し上げて、私は破れ提灯の隠れている納屋に向かいました。

私の顔を一目見るなり、破れ提灯は…わざとらしい咳を始めました。

「どうやら、風邪をひいたようでございます…ごほごほ」

「……………もう」

「本当でございまするっ!こんなに頭も痛くて…少し熱っぽいのでございまする」

「…体の中でいつも灯を燈しているんだから、熱くて当たり前じゃないですか?」

「うう、本当なのに……………」

「いいんですか?皆さん、帰り道がわからなくて困つてらっしゃるんですよ!?」

いつになく強い調子の私に、破れ提灯は瞳を潤ませ懇願します。

「夢さんお願いしまする、あと…もう一晩だけっ!そしたら明朝には必ず元気になって、ちゃんと皆さんを連れて元の住み処に帰りますから」

この台詞…一体何度聞いたことでしょう。

「ちよつとは…勇気を出してください！」

「…勇気？」

そうですね、と大きく頷いて、私は彼の前にしゃがみ込みました。

「破れ提灯さんは…一旦逃げ出したことで弱気になつてらっしゃるんです。本当はこのままじゃいけないって…わかつてるんでしょう？」
「……………」

「きつと…一歩前に踏み出す勇気を忘れてしまつてゐるんですよ。嫌なことを後回しにしたくて、明日は、明日こそ、明日には必ず…つて」

「でも…本当にお腹が痛いのでございます」

「嫌なことがあるから、痛い気がするだけです。後回しにする言い訳が出来るから…私達だけじゃなくて、ご自分に対する…言い訳が」

「ぼくに…ですか」

嫌なことがある時に、そんな虫が悪さをするのは…人も化人さまも同じのよう。で。

しめた、これで嫌なことから逃げられる…と思うと、大層楽な心地になるものです。

「でもね…勇気を振り絞つて、えいっと前に踏み出せばきつとすつきりしますよ。お腹が痛いのも頭が痛いのも、たちまち吹き飛んでしまいますから」

破れ提灯はぽかんとしたまま、黙つて私の話を聞いておりました。

そして、暫く考え込んだ後…………

嫌でございます、と…大きく首を振りました。

「行列の皆さんは…僕の苦勞なんか、ちつとも分かつちゃくれないのです」

「そんなこと…」

「どんなにぼくが頑張つたつて、ぶつぶつ不満を言うばかり。あの方々はただの一度も僕に『ありがとう』とか…感謝の言葉をかけて

くれたことはないのです」

はあ…と、彼は煤まじりの黒いため息をつきます。

「そもそもぼくがいけないのでございます…ぼくが何をやってもうまく出来なくて、いつつもいつつもとじばかりしているから…」

破れ提灯のその言葉に…なぜかどきりと胸が高鳴りました。

「ぼくなんか…どうせいつまでたっても、一人前の先導にはなれないのでございます」

何をしたって中途半端で。

何をしたっていまいちで。

こんな風では…

一体、いつになったら……

その時です。

耳をつんざくような女性の悲鳴が、蔵の外から聞こえてまいりました。

あれは……

「ゆづきさん……？」

心配になりますが、暗く沈みこんでいる破れ提灯を放っておくわけにもいかず。

破れ提灯といえば、外の騒がしい気配などそっちのけで、私に背を向け俯いています。

「ぼくのことなんか、きつと皆さんも忘れてしまっているのでございます。ぼくなんかいなくなつて、皆さんは…ぼくなんか、百鬼夜行のお荷物なのでございます…」

「破れ提灯さん…」

「あいつがいなくなつて清々したとか、皆さんはきつとそんな風に…」

「それが事実かどうか…自分の目で確かめてはどうだね？」
振り返ると、戸口に立っていたのは笑顔の杏珠さまでした。

木陰に隠れて、さつきゆづきさんと座っていた縁側の方を覗いてみます。

すると。

「破れ提灯はどこだ」

「お前達が隠しておるのだろう」

「なんといつでも我らの姿が見えるのだからな」

「おぬしらが見えておるのに違いはない」

「出せ出せ」

「出さぬというのなら、街の連中をひどい目にあわせるぞ」

「そうだそうだ」

何やらがやがやと騒いでいるのは…百鬼夜行の化人さま方でした。ゆづきさんは気を失っておられるようで、板張りの縁側にぐったり倒れておられます。

そして、まあまあ…と両手を広げ化人さま方を諷めておられるのは、つづみ姐さまとみこと姐さま。

「あれ……………」

目を丸くして、破れ提灯が化人さま方を見つめています。杏珠さまは私達に向かって、いたずらっぽく片目をつぶっておっしゃいました。

「まあ…見ているがいいさ」

ふむ、と顎に手を当て、つづみ姐さまが化人さま方をご覧になります。

「確かに…ぬしらの探しておる破れ提灯はここにおった」

思わず…破れ提灯と顔を見合わせてしまいます。

一体、姐さまは何をおっしゃるおつもりなのか…

何かお考えがあるのでしょいか。

「なんだと」

「やはりそうであったか」

「隠し立てせず早く出さぬか」

「そうだそうだ」

「破れ提灯を出せ」

ぬつと身を乗り出す化人さま方を、まあそう慌てるでない…と落ち着いた声で制する、つづみ姐さま。

いつもの素っ気ないそぶりで、明後日の方向に目をむけておっしゃいます。

「ここに『おった』と言ったのじゃ。つい今朝がた、行く先も告げずにどこかへ消えてしまつての。なあみこと」

ええ…と頷き、みこと姐さまは穏やかな微笑みをたたえ、化人さま方におっしゃいます。

「なんや…えらい悩んではるみたいやつたけど。自分は駄目や、先導失格やて」

「おお、そうじゃったな。ぬしらは大分あれをいびつておったようではないか」

大小様々なお姿の化人さま方は一様に目を丸くして、周囲の方々と顔を見合わせます。

「いびるなど」

「聞こえの悪い言い方をするでない」

「わしはあれに大層目をかけてやつておったぞ」

「何を言う」

「おぬしはいつも、あれにきつく当たつておったではないか」

「それを言うなれば、そなたはいつもあれに文句を言うておつたろう」

「それならば、あやつの方が」

「わしだと、そんなはずはない」

化人さまの集結した館の庭が、俄かに騒がしくなりますが。

とある化人さまの一言で、辺りは水を打ったように静かになりました。

「占い師の娘の、そなたはいかにもわしらが悪いように言うが、あれにも注文の付け所はたんとあつたのだぞ」

「ほう…注文とな」

「一体、何が不満やったん？」

化人さま方は一斉に身を乗り出し、姐さま方におっしゃいます。

「だいたいあれは、先導の癖に方向音痴なのだ」

「左様」

「地理にも暗いしな」

「あれについて参ると、同じ所をぐるぐる廻らねばならぬ」

「それに、あれは声が小そうて通らぬ。ようく耳を澄まさねば、列の後ろの方の者はたちまち取り残されてしまうわ」

「動作ものろしておつて、後ろで見ていて苛々するぞな」

「やはり先導は道に明るく、きびきび我らを導いてくれねば」

口々に不満をおっしゃる化人さま方を、涙目で見つめる破れ提灯。体の中に灯った明かりは、いつのまにかしょんぼりと消えてしまつておりました。

姐さま達つたら。

このままでは…破れ提灯が余計に自信を無くしてしまうのに。

愉快そうに化人さま方の騒ぎを眺めていらつしやる杏珠さまも…お考えがさっぱりわかりません。ここで一念発起、立派な先導として頑張れるよう、はっぱをかけていらつしやるおつもりなのでしょうか。

先程の破れ提灯の一言が、不意に脳裏をよぎります。

『ありがとつの一言も…』

そう。

愛情のある叱責ならば、しっかり受け止めて精進しようと思つのです。

でも…

彼の気持ち、私には痛いほどわかる気がいたします。

己の不出来は、自分が一番よく分かっているもの。

それでも、やはり…

優しい言葉が欲しくなってしまうのです。

些細なことでもいい、『ありがとう』とか『よくやった』とか……
につこり笑って言ってもらえたら、どんなに気持ちがいやんとすることか。

そう……あの時だって。

『杏珠さまの弟子だから』ではなくて。

『夢はよく精進しているから、きつとすぐに一人前になれる』とか……
そんな言葉が欲しかったのだと思いました。

こんなこと……きつと、しっかり者の姐さま方には理解してはいただけないでしょう。

それに……杏珠さまにも。

破れ提灯に合わせ、私が大きなため息をついた……
その時でした。

「だが、わしは先導があれに代わって、夜行が以前より楽しくなつた」

「ほう」

「それは何故じゃ」

「あれが道を知らぬ故に、今まで思いもよらなかった道を通るようになったであろう」

化人さま方は、不意に黙って互いに顔を見合わせます。

「成程」

「以前の先導の時分は、道が単調で退屈に思ふ時もあつたな」

「あれは相当な頑固者であつた故、我々の意見などまるで通らなんだ」

「それに比べれば、あれはわしらの話をよう聴いてくれるではないか」

「確かにそうだ」

「未熟ゆえに、思ふようには行かぬがな」

「未熟なりに、我らの意向に沿うよう心を尽くしてくれておる」

「あれの灯りが他の先導よりも暗いのも、声が小そうて通らぬのも、

おどろおどろしい雰囲気を醸して愉快ではないか」

さっきまでの不平不満はどこへやら、口々に破れ提灯を褒め始めた
化人さま方に。

破れ提灯はぽかんと口を開け、呆然としております。

「…では」

縁側に立て膝で座り、にやりと笑うつづみ姐さま。

「こういうことじゃな？色々文句も言っではおるが、ぬしらは破れ
提灯に一目置いている…」と」

ざわざわしていた化人さま方が、またぴたりと静かになります。

「そうではない」

惘然とした声。

「あれはまだまだ未熟だ」

「申し述べたいことは星の数ほどある」

「あのままで良いなどと思うたら大間違いじゃ」

「もつと道も覚えて貰わねばな」

「先導らしゅう、大きな声ではきはきと物も言うて貰わねば」

「何を置いても、先導が道案内をほつり出すなぞ言語道断」

「そうだそうだ、自覚が足りぬ」

「だが」

化人さま方は、しかめつつらのまま口を揃えておっしゃいました。

「破れ提灯にはいてもらわねば困る」

「あやつにはこれから、われらを導いてもらわねば」

思わず顔が綻んでしまい…隣をちらりと盗み見ると。

「…あら？」

そこに、彼の姿はなく。

目をきらきらさせた破れ提灯は、化人さま方目掛け駆け出しており
ました。

「みなさま、ご心配をおかけしました〜！」

大小様々なお姿の化人さま方は、一斉に振り返り。

「破れ提灯ではないか」

「ほれ見たことか、やはり隠しておったのではないか」

「小娘どもが、謀りおって」

「そんなことより、破れ提灯だ」

「おぬしのおかげで散々だ」

「一張羅が昨夜の雨で台なしになってしもった」

「歩き疲れてもうへとへとだわい」

「誰がおぬしの心配なぞするものか」

「何をばやばやしておる、はようわれらを連れて帰らぬか」

相変わらず口の悪い皆さんに…破れ提灯は潤んだ瞳で、笑って頷きます。

「皆さん、本当に素直じゃないんだから…ぼく、困ってしまいまする」

全然困っていないさそうな声で言つて、彼は体に明るい灯を燈しました。

「はい、みなさまこちらです！近道しますからはぐれないように気をつけてください」

くたびれた、道の悪いのは嫌じゃなどとおっしゃりながら、化人さま方は小さなその背中に続いて歩き始めます。

整然としたその行列は、今までに見た百鬼夜行の中でも…一番に愉しそうに見えました。

「杏珠さま、夢さん、みことさんにつづみさん！ほんとにお世話になりました」

自信を取り戻した、明るい破れ提灯の声が周囲に響き渡ります。

「みなさんのご恩、ぼく一生忘れませんっ！いつか立派な一人前の先導になって、みなさんに恩返しに参りまする」

「おお、せいぜい頑張るがいい」

けらけらと愉快そうに笑うつづみ姐さま。

「けど…今度はゆづきのおらへん時にしたげてな」

困ったように笑って、みこと姐さまもおっしゃいました。

「化人どのにも色々なご苦労があるもんだねえ…」

穏やかな調子でおっしゃる杏珠さまに、私は無言で頷きます。

「心で思っていることは、なかなか口には出しにくい。いつも近くにいたとしても…それが照れくさい言葉ならば、尚更のことさ」

……杏珠さま。

「まるで人のようじゃないか。そう…思わないかい？夢」

何だか…体の芯が、急にあったかくなるような心地がいたしました。寒い日に囲炉裏にかざした、かじかんだ手のように…少しくすぐったくて、じんじんして。

「私…そろそろ夕餉の支度をしてまいります！」

そう言っただけは…

いつになく柔らかい杏珠さまの眼差しから逃げるように、台所へ駆けこんでしまいました。

その夜の夢は、えらくご機嫌な様子だった。

今日はちよつとだけご馳走にしてみました、と胸を張る彼女の手料理は、確かにいつもより品数が多かったし、内容もまたなかなかのもの。

杏珠さまの好物の蛤の吸い物に、みことの好物の白和えに、ゆづきの好きなばらちらし。

それに。

だしのきいた優しい味がする…だし巻きたまご。

どういふ風の吹き回しだい？と訝る杏珠さまに、ふふふと嬉しそうに肩を竦めて笑う夢は、すっかりいつもの元氣を取り戻したようだ。…それに引きかえ。

心地良い風が頬を撫でる、今宵はこんなにいい夜だというのに…

相変わらず青い顔で浮かない表情の…ゆづき。

私は暗い道をとぼとぼやや遅れ気味について来る彼女を振り返り、溜息をついて両手を腰に当てた。

「ゆづき、いい加減にせぬか！ぬしは一体いつまでさっきの化人騒

ぎを引きずっておるつもりじゃ」

「…もう、やめてよ！思い出しちゃうじゃない」

しかめつつらでゆづきが首を振ると、後ろで束ねた長い髪がふわりと風になびく。

全く…普段の威勢のよさはどこへ行ってしまったのだろう。

あの騒ぎで失神してしまい、目を覚ましてからこっち…ずっとこんな調子で。

せつかくのご馳走にもほんの申し訳程度しか手をつけないものだから、さすがの私も少し心配になって、家まで送ろうと申し出てしまったのだった。

「さっきの夢を見たじゃろう、ぬしはせつかくの才能を無駄にしておるのだぞ？」

「こんなもの…才能なんかじゃないわよ」

欲しい人がいるならあげるとそっぽを向いて、すいと私を追い越していく

「夢ちゃんがうらやましいわ、私…あんな不気味な物見ても動じない上に、占いを何の抵抗もなく受け入れられるんだもの。厳しい師匠と身勝手姐二人にもめげずに」

「おい…姐のところは訂正せい」

私の苦情なぞ意にも介さず、ゆづきはふう…と溜息をつく。

「あんなに瞳をきらきらさせて、早く一人前の占い師になりたい…なんて」

今からでも遅くはないぞ、と私が言つと、不愉快そうに眉を顰め首を振る。

「私にはとても無理だわ」

だって私、占い師なんて大嫌いなもの。

ゆづきは静かに呟いた。

ゆづきと私の間に、一陣の風が吹き抜ける。

長い髪を夜風に遊ばせて、背を向けたままの彼女の表情を伺い知ることが出来ないが。

私もどういふ顔をしたらいいか困るので、実は好都合なのだった。こつという時は…いつもそう。

はて、何と答えたものかな。

『ぬしの大好きなみことは占い師ではないか』と…からかつてやるか。

それとも。

『ぬしになぞ嫌われて丁度よいわ、せいせいする！』と…啖呵をきつてみるか。

『好き嫌いはぬしの勝手じゃが、夢にだけは言つなよ。後進のやる気を削がれては困るからな』と…呆れた顔を試みるか。

…それとも。

『ぬしの………』

「ごめんね、つづみ」

夜道に浮かんだ頼りなげな後ろ姿は、無表情な声で言う。

「いつも…本当にごめん」

「…もう、よい」

ふう、と一息を吐く。

そして…気を取り直して。

「気弱なゆづきなぞゆづきではないわ！気味が悪うて堪らぬ」

いつも通りの…悪態をついてやると。

うるさいわねえ大きなお世話よ！と、いつもの怒鳴り声が返ってきた。

ゆづきが先に声を掛けてくれて良かった。

お陰で、喉元まで出かかった言葉を…引っ込めることが出来たから。怒ったように肩をいからせ、ずんずん先に歩いていくゆづきは相変わらずこちらを見ない。

「おい、一人で帰れるのならわしはもう帰るぞ」

「そうしたいのならそうすれば？ありがとね、こんな所までついて

きてくれてっ」

投げかけた言葉に、拗ねたように応えるゆづき。

「じゃあね！おやすみ、つづみっ」

肩越しにひらひらと手を振る、ゆづきは泣いているのかもしれない、と…思った。

「おやすみ、ゆづき。今日は…良い夢が見れるとよいな」

第五話 鳴かぬ蛭の恋のお話。

このところ日増しに夏めいて参りまして、夕刻涼しい風が吹きますと、思わずほつと溜息をついてしまします。

みこと姐さまのお部屋の軒下で揺れる、風鈴のちりちりという上品な音に耳を澄ませつつ、私は不意に沸き上がってきた疑問を口にいれました。

「蛭狩りって」

「…何？」

水晶玉を磨く手を止めず、しかし姐さまは優しい声で聞き返してくださいます。

「何で『狩り』っていうんでしょうね。実際に蛭を捕まえる訳でもないのに」

「そんなん言うたら、紅葉狩りかて別に紅葉は集めへんやない」

「でも、紅葉は木ですけど…蛭は生き物なんですよ？鹿を狩る、と言えばほら、命を取ることでしょう？」

占い道具の手入れをしていた手を止め、みこと姐さまはきょとんとした瞳で私をご覧になります。

「…妙なこと思いつくなあ、あんたは」

まあ確かに…と頷いて、艶やかな長い髪に手をやり。

姐さまはふわりと微笑んで、穏やかな口調でおっしゃいました。

「きつと昔の人らが…蛭さんは命も短いし、悪さしたら可哀相やて思わはったんやろ」

「…なるほど。」

「難儀やと思わへん？一生のうちほとんどの時間を暗い水ん中で過ごして、ひと夏の間目一杯輝いて、恋をして、子を残す…て」

「…そうですね」

そんな儚い美しいものに心惹かれてのことか。

街の皆さんの間では、夏の風物詩、蛭狩りが大はやりなものでした。

「蛍にも…化人さまはいらっしゃるのですか？」

「ええ。ここの河原、あちらの河原で…縄張りみたいなんはあるみたいやけど」

そっか。

街の外れの小さくて清らかな川に棲む化人さまは、大層お綺麗な方なのだそうです。

蛍の恋…か。

蝉や鈴虫とは違い、高らかに鳴くことなど決してなく。

それでも、大好きな人に見つけてほしくて…ただ静かに、身を焦がすように光を放っているのでしょうか。

そんなことに思いを馳せておりましたら…ふと。

昼間の奇妙な客人さまのことが、脳裏に蘇ってまいりました。

「何か…お困りですか？」

いつも通り『めいばくそう』の前を十回行き来した方に、私は笑顔でお声をかけました。

すると。

姐さま方と同じくらいの年の頃の、上品な着物に身を包んだその男性は、あの…と躊躇いがちに口を開きました。

『ここでは……………』

『…はい？』

『と…そのお……………恋……………の…悩みなども…聞いていただけるのですか？』

あら。

少し年上らしい男性のかわいらしいご相談に、思わず笑みが零れてしまいます。

『ええ勿論です。若い方ですと、そういったご相談の客人さまがほとんどで』

『……………そう…ですか』

不安げな瞳に一瞬、光が点ったように思えたのですが。

彼はふう、と小さく溜息をついて、ありがとうございましたとお辞儀をなさると…ふいと館に背を向けてしまわれました。

『あの…お待ちください！お話だけでもして行かれては』

『いえ…結構。失礼いたしました』

猫背がちなその後ろ姿は、明るい陽射しの中にあって…淋しげな影を帯びておりました。

「私…何か失礼なこと申し上げたかしら」

呟いた私に、微かな衣擦れの音とともに立ち上がったみこと姐さまがおっしゃいます。

「夢みたいな可愛い子に聞かれて…恥ずかしくてしまわはったんじゃない？」

「そつ…そんな、可愛いなんて私…」

思わず顔を赤らめた私に姐さまは愉しそうに目を細め、顔を上げて半分に欠けた月をご覧になりました。

「まあ…ほんまに悩んではるんやったら、またお越しになるやろ。

あんたは心配せんでもええ」

ほのかな白い光に照らし出される、みこと姐さまの横顔はそれはそれは綺麗で。

でも……

何故だか少し…哀しげで。

みこと姐さまにも…

私の知らない…身を焦がす恋があるのでしょいか。

「…そうですね」

私は小さく頷いて、自分の部屋へ戻ろうと立ち上がりました。すると。

「おーいみこと、ぬしに客人じゃぞ」

戸口に立って欠伸まじりでおっしゃったのは…つづみ姐さまです。

「私に？」

「こんな夜更けに…ですか？」

んーと困ったように頭を掻き、姐さまは床に視線を落とします。

「わしもそう言ったんじやがの…明るくなつてから出なおしてくれと。じゃが…杏珠さまがどうしてもとおっしゃって聞かぬゆえ」

「杏珠さまが？」

「…一体どういう」

なんでも…と私達を導くように、つづみ姐さまは背を向け、廊下を歩き始めます。

「『こんな夜更けに』しかここへ来れぬ事情の…客人らしい」

みこと姐さまのお仕事部屋に座っていたのは、一人の美しい女性。

白地に紺で紫陽花の花模様が染め抜かれた浴衣を通して、全身から…淡い黄色い光を放っていらっしやいます。

姐さまが座につかれますと、彼女は膝の前で両手を揃え、黙ってお辞儀をなさいました。

驚く気持ちを鎮めるためか、みこと姐さまは青い石の耳飾りに手をやり…

静かに…お尋ねになります。

「あんた…化人さんやね？」

『……………』

「あの……………川の…蛍の」

『……………はい』

なるほど…と呟き、一緒に部屋を覗き見ていたつづみ姐さまが私の方をご覧になります。

「そういえば、久しくなかったな。ああいう…」

化人の…客人さま。

『めいぼくそう』へは、様々な客人さまがいらっしやいます。

街の皆さんだけでなく、占いの評判を聞き付けた遠方の方もいらっしやいますし、話の種にと近くの港町に仮住まいをしていらっしやる、異人さまがお越しになることもあります。

それに……………悩みをお持ちの化人さまも。

「先の破れ提灯も客といえは客だが、どちらかというと…」転がり込んできた」というほうが近かったからの」

「そうですね」

丁度先程、みこと姐さまと彼女の噂をしていたばかり。

美しい蛍の化人さまに…一体、どんなお悩みがあるのでしょうか。

蛍様がその男性と出逢ったのは、三年前の夏の夜だったそうです。

蛍の飛び交う季節が終わると、彼女はまた次の夏まで長い眠りにつかねばなりません。

川原を散策する、愉しげな街の皆さんの様子に心惹かれ。

「川のほとりに立ち…行く季節を惜しんでいたのです。そうしましたら」

「蛍がお好きなのですか？」

愛しい人を脳裏に思い描いてのことが、蛍様は嬉しそうに目を細めます。

「私は蛍は嫌いです」

「それはまた、何故じゃ？」

覗き見をやめ部屋に足を踏み入れたつづみ姐さまが、興味津々な表情でお尋ねになります。

「蛍の光はぼんやりとして、はつきりしないのがお嫌なのですって。そんなことをおっしゃるものですから、さぞはつきりとした男氣のある方なのだろうと思ったのですけど」

「はつきりしないのは、まるで自分の姿を写し見ているようで…嫌なのです」

…何だか、不意に体の力が抜けてしまい。

隣のつづみ姐さまも、ずるっ…と前のめりになっておられます。

「その…なんや、おもしろいお人やなあ」

目を丸くしたみこと姐さまがおっしゃいますと、そうなんです、と嬉しそうな表情で頷く蛍様。

『面白くて、それにとっても愛らしくて。しばらくお話しているう

ちに、私何故だかとても…別れ難くなつてしまつて」

『また明日も…ここで会えますか？』

同じ思いだったらしい彼の言葉に、胸が熱くなると同時に…淋しい思いに囚われたのです、と蛸様。

『それは…その夏を過ごせる最後の夜だったのです。かといつて、事情をお話する訳には参りませんし…困惑する私に、慎一郎様は『明日が無理ならば明後日でも構いません。私はあなたがいらつしやるまで、毎日この川原でお待ちしています』…と』

「それはまた、随分と手練手管の巧みな御仁じやのお」
はつとして…

私は、あつけらかんと言ひ放つたつづみ姐さまの袖を引っ張りました。

しかし、姐さまは強張つた表情の蛸様に、だつて…と悪びれない様子でおっしゃいます。

「そんな殺し文句、街の凡庸な若い衆には言えんじやろ。よつぽど遊び慣れておるな、と」

「けど…そない口説き上手なお人が『はつきりしない性格』やなんて、自分のこと言つたりするやるか」

非難するでもなく不意に湧き上がった疑問を口にした…そんな素振りのみこと姐さまに、つづみ姐さまはさも当然のことと言わんばかりの表情で、ひよいひよい手を振つて答えます。

「わざと弱い男を装うほうが女受けの良いこともあるからな。押したり引いたりしてみて、相手の琴線に触れるような態度を探るのは…花街の常識ではないか」

「ちよつと…姐さま、いい加減に」
なさってください、と私が言いかけた…その時です。

蛸様がすつくと立ち上がり、怖い顔でじつと…つづみ姐さまをご覧になりました。

そして…きつぱりとおっしゃったのです。

『慎一郎様はそんな方じゃありません』

「そ…そうか」

『そんなおっしゃり方、この私が…断じて許しませんから』

「何であんなことおっしゃったんですか？」

「だって…ぬしは思わなんだか？」

「思いませんよ…そんなこと」

みこと姐さまに部屋をやりわりと追い出され、私達は縁側で傾きかけた半分の月を眺めておりました。

つづみ姐さまはいえば、悪びれる様子など微塵もなく。

「わしゃ、ああいうのが大嫌いで。あんな色惚け話をうつとりした目で語られては、体が痒うて痒うて仕方が無いわ」

愉快そうにけたけた笑う姿に…思わずため息をついてしまいます。

だから…恋占いの類は、みこと姐さまに一切任せてらっしゃるのね。

「私、そんな風に…真剣に誰かに恋をしてらっしゃる方を笑うものではないと思います」

眉間に皺を寄せて言う私に、不思議そうな顔をする…つづみ姐さま。

「姐さまは…ないんですか？真剣に誰かを好きになられたこと」

ぽりぽりと頭を掻いて。

「……………どうじゃったかのお」

とぼけた姐さまの口ぶりに、私はまた一つ…ため息をつきます。

「夢こそ…まるであの化人どのの気持ちがかかるような話ぶりだが？」

「……………えっ？」

かあつ…と、顔が熱くなるのがわかりました。

してやったりという顔をした姐さまは、綺麗な紅色に塗られた指先でちよい、と私のおでこを突っつきます。

「なんじやなんじや？ぬしは…半人前のくせに、いつちよまえに想い人でもおるのか？」

「そつ…そんな方、いらっしやいません！何おっしゃってるんですか！？」

「本当かあ？何なら当ててやろうか？ほおれ顔に書いてあるぞ、ぬしが惚れておるのは」

「やつ…やめてくださいってば！…！」

「なんや愉しそやなあ、二人してこんな夜中に大声出して」

振り返ると、みこと姐さまが穏やかな笑みを湛えて立っていらっしやいました。

「客人はん、帰らはったえ？」

「で……どうじゃった？」

「どうて…何が『どう』やの？」

「だから！化人どのの要求じゃ。あの様子から察するに、縁結びの相談はもう間に合っておるようだし」

「……………」

興味津々なつづみ姐さまに…私はまたもう一つため息をつきました。みこと姐さまは笑顔のまま黙って、私達の側にちょこんとお座りになります。

「なあ、勿体振らずに言わぬか」

「……………そう言われても、あんたらが部屋出て行ってからこっち、あの人たと口数減ってしまつて。明日彼がここへ来るて…そんだけ言つて、姿消してしまわはったわ」

「そうか…明日かあ」

大層残念そうな声でおっしゃったところで…

つづみ姐さまは何かに気づいたようなご様子で、依然として涼しい笑顔のみこと姐さまにお尋ねになります。

「まさかとは思つが…」

相手の出方を探るような…押し殺した低い声。

「みこと…ぬし、もしや……………怒っておるのか？」

「まさか」

みこと姐さまは静かに浮かんだ月のように穏やかな表情で…きつぱりと、おっしゃったのでした。

「怒ってるんやのうて、呆れてるんや」

その日のつづみ姐さまの様子といたら…ございませんでした。

「なあ、夢！」

客人さまが帰られる度に…

「例の御仁は見えたか！？」

私を探して、そう…お尋ねになるのです。

私が…ご注意するのも億劫になり、黙って首を振りますと。

そうかぁ！と指を鳴らして悔しがり、その度こうおっしゃるのです。

「よいな夢！占いの最中でも何でも構わん、見えたら必ず！わしに一言知らせるように！」

……もう。

あんなに『色恋なぞ虫酸が走る』って…おっしゃっていたのに。

「本当は…大好きなんじゃない、つづみ姐さま」

つづみ姐さまにも、私の知らない身を焦がす恋が…？

いえ………到底想像出来ません。

でも。

…こんなこと、不謹慎とは重々承知しているのですが。

つづみ姐さまのせいで、私も…『慎一郎様』とやらのご訪問が気にかかり、つい仕事がつわの空になってしまつのです。

「…いけないいけない！これも修業のうちだもの、しっかりしなきゃ」

大きく首を振って、館の前の掃き掃除に取り掛かった…その時でした。

地面に向けていた視線の先に…見覚えのある草履の鼻緒が写ったのです。

何故そんな些細なことが記憶に残ったのか、大層不思議なことではあるのですが。

黒に金の糸が織り込まれた、それは上品で美しい布地で出来ており

ます。

ときどきする胸を深呼吸して鎮め、私はゆっくりと顔をあげ。

『慎一郎様』に…昨日と同じ笑顔を向けました。

「お待ちしておりました…やはり、あなただったのですね」

ご自身を『はつきりしない』と称されたという、慎一郎さんですが、今日は門前で逃げるようなこともなさらず、神妙な顔でみこと姐さまの前にお座りになりました。

そして…

「人間に？」

「…はい」

「あの……化人はんを？」

力強く頷いて、慎一郎さんは深々と頭を垂れました。

「おっしゃる通り。蛭子を…どうか、人間にしてやってはいただけませぬでしょうか？」

私は戸惑ってしまい…視線を畳に落とします。

そんなこと…

「夢のようなことを申しておるのは重々承知しております。ですが私は…どうしても彼女を妻にして、一緒に暮らしたいのです」

夏の初めの、ほんの僅かな逢瀬しか許されぬ二人。

そんな間に育まれた恋を、なんとか成就させてあげられたら…と、胸が苦しくなりますが。

こればかりはいくらみこと姐さまでも…さすがに難しいのではないのでしょうか。

……ですが。

みこと姐さまは、今までに見たことがないくらい厳しい表情で…じつと慎一郎さんを見据えていらっしやいました。

しばし、沈黙が流れ。

姐さまは長い睫毛を伏せ…静かに問い掛けます。

「あんた…本気なんやね？」

「…はい」

「化人はんが人になる…いうんは、並大抵のことやない。あんたに…それに見合うだけの覚悟はある？」

「……………」

なんだか……………不思議。

お二人の願いがまるで、すぐにでも叶うようなおっしゃり方。

慎一郎さんは穏やかなみこと姐さまの厳しい言葉に、一瞬…言葉を詰まらせましたが。

目を伏せ、ふうつと一つ息を吐き。

真剣な眼差しで姐さまを見据え、はい、と…静かに答えになりました。

すると。

姐さまは黙って珊瑚の髪飾りに手をやりながら…意外なことをおっしゃいます。

「実は…こんなことやないか、って思ってたんや」

「…みこと姐さま？」

「それでな…さすがに私の手には負えへんから」

いつもの柔らかい笑顔に戻った姐さまは、水晶玉の載った机の小さな引き出しから黒く光る小さな石を取り出しました。

石には穴が空いていて、紫と金の交じった組紐が通っています。

慎一郎さんの手の平につるんと丸い石を滑らせると、姐さまはにっこり微笑んでおっしゃいました。

「杏珠さまがこれをおんたに…て。毎日欠かさず、よくお月さんの光に当てたげてな」

「月の光に…ですか」

「そ。毎日ちよつとずつ時間も変わるし、難儀やとは思っけど…とんでもない！と大きく首を振って、彼は目を輝かせます。

「頑張ります！これが続ければ、蛭子は人間になれるんですね！？」

「ええ…月が真ん丸くなって、欠けて、姿現さへんようになるまでな。そうすれば……………あんたらの願いは叶う。杏珠さまがおっしゃ

るんやから間違いないわ」

私は思わず……深いため息をつきました。

思えば…蛭様が館を訪ねて来られた昨晚の出来事から、杏珠さまには全てお見通しだったのでしょうか。

その上、こんなに不思議なおまじないを授けてくださるなんて…凄いです。

ですが。

杏珠さまのお力は、時に人の域を飛び越えているようにさえ思われる…

少し、背筋が寒くなる気がいたします。

元気いっばいにお辞儀をして帰って行かれる慎一郎さんを、手を振ってお見送りした後。

みこと姐さまは顎に手を当て、考え込むような表情をなさいました。

「さて、と…ここからが問題やな」

「………問題？」

あんなに張り切っていらっしゃったのです、彼ならばきつと難しいおまじないもやり遂げてくださるはず、と…思うのですが。

私がそう申し上げますと、姐さまは可笑しそうに微笑んで、ことりと首を傾けました。

「そっちやないの。私が心配なんは…」

それから、何週間か過ぎ。

私が庭の掃き掃除をしておりますと、縁側にぶらりとつつみ姐さまが出ていらっしゃいました。

「聞いたか？夢」

扇子をぱたぱた動かしながら…どこか含みのある声でおっしゃいます。

「件の慎一郎殿の…奇行とやらの話」

「………姐さま？」

咎める私にお構いなしで、漆塗りの下駄を突っかけながら、姐さまはけらけらと高笑いを上げていらっしやいます。

「月夜を一人、灯りも持たずさ迷うておられるそうじゃ。その前は一人で川原に立つておることが多かったそうでなあ。『川の神に乗り移られた』なぞと…なかなかどうして、街の衆もいい所をついてくるとは思わぬか？」

「もう…そういう言い方をなさるものではありませんよ？ 慎一郎さん…真剣なんですから」

陽射しが日増しに強くなるにつれ、夕刻の蛍の光は次第に淡く小さくなってゆきます。

何も、そうむきにならんでも…というみこと姐さまの言葉を振り切つて、街の皆さんが笑うのにもお構いなしで、夜通し『石』に月の光を当ておられる慎一郎さんの胸は…きつと、焦りと不安でいっぱいなのでしょう。

「幸せだつて思いませんか？ あんな風に…ひたむきに一人の方に愛される、なんて」

はあ？ と呆れ顔で眉を吊り上げ、青い指輪の光る白い手をひらひら振ってみせる…姐さま。

「やめておけやめておけ、あんな女々つちい男なぞ…ぬしには釣り合わぬぞ」

くるりと踵を返した背中に、私は思わずお声をかけました。

「ちよつと…姐さま！ お仕事ほったらかしてどこへ行かれるんですか！？」

「散歩じゃ、さ、ん、ぼつ」

見ると、無造作に肩に掛けていらっしやるのは…小さな徳利のようです。

「…もう」

「あら、つづみおらへんの？」

暢気なみこと姐さまの声に…私は振り返つてお答えします。

「今出かけられましたよ、こんな明るいうちからお酒なんかぶらさ

げちゃって」

あらあら…と困り顔で笑って、姐さまは琥珀の耳飾りに手をやりま
す。

「そういえば…前にもあったんですよ？こういうこと」

「…そうなん？」

「ええ！お二人の純愛をあんな風に笑っておきながら、ご自分はふ
らふらなさってて…本当、何をお考えなんでしょうね」

ふふふ…と微笑んで、姐さまは空に浮かんだ柔らかそうな雲を仰ぎ
見ます。

「まあ……仕方ないか」

「仕方ないって…どういう意味です？」

姐さまはつづみ姐さま同様、縁側から庭に出て、私を館の外へと誘
いました。

「さてと、夢も行くやろ？」

「…どこへですか？」

咄嗟に聞き返した私に、姐さまは意味ありげな笑みを返します。

「そろそろ、お月さんも細く暗くなってきて…明日あたりはとうと
う新月や」

「はい。でも……え？」

はっと…息を呑みました。

『もう一つの心配事』

あの時の、みこと姐さまの言葉が蘇ってきたのです。

姐さまは、涼しい笑顔で館の方へ視線を投げ。

「ほな…行ってまいります」

「ああ…気をつけるんだよ」

驚いて振り返ると。

いつの間に…襖が開いて、杏珠さまが立っていらっしやいました。

「夢も、ぐずぐずしないでみこととお行き！」

「え…っ…はい！」

大きな声でお返事をした私に、満足げに頷いて。

杏珠さまは、腕組みをして…おっしやいました。

「まだ陽は傾き始めたばかりだが…かなりの道程だ。早く行かねば日は暮れ夜が明けて…大事な日を迎えてしまうからね」

第六話 蛭と月と星の石のお話

杏珠さまのおっしゃることは、まったくいつも正しいのです。

「もつと…慣れた履物にすればよかったな」

「大丈夫？夢…」

私は指の間のまめが痛む足を摩りながら、なんとか笑ってお答えしますが。

みこと姐さまは…この蒸し暑い空気など何でもないご様子です。

浅黄色の着物も一切乱れる様子がなく、館を発った時と同じ歩幅ですいすいと歩いておられ。

なんと申しまして、額に汗の雫一つ浮かんでいないのです。

お綺麗な方というのは…私達と少し、体の仕組みが違っていらつしやるのかも知れません。

「もうすぐやし、あんじょう気張ってな」

「…はあい」

これも全て、蛭様と慎一郎さんの幸せを思つてのこと。

私は大きく息を吸い込むと、思い切り大股で歩き始めました。

……………そして。

静かで清らかなその沼のほとりには、沢山の蛭が舞い踊っておりまして。

ようやく姿を現した弱々しい月の光の映し込む隙がないほど…水面は無数の黄色い愛らしい光を受けて、きらきらきら輝いて。

息を吞んで黙り込む私を…みこと姐さまはご自身の背中に押しやり、凜とした声で、化人さまをお呼びになりました。

すると。

水面の黄色い光が一層増したかと思つた、次の瞬間。

藍色の着物を纏った女性の姿が…沼の上に浮かび上がったのです。

『誰かと思えば…杏珠のところの占い師か』

年の頃は、人にして五十ほどでしょうか。

髪に白いものが混じり、その目元には微かな皺も見えますが。

若かりし日をご想像すると、あれほどの美貌の持ち主である川の蜚様も叶わぬのではないかと思えるほど…お美しい方でした。

それに…

全身から放たれる光も、不思議なお力も…ずっと強いように思われます。

空気を震わすような緊張感で…まるで金縛りにでもあつたかのよう

に、私の体は動かなくなっていました。

悲鳴をあげることもままならず…息をするのがやっとです。

ですが。

そこはさすが…みこと姐さま。

まったく動じることなく、ゆっくりと髪をかき上げ。

「光栄ですわ。あんたはんみたいに力のある化人はんが、私のこと

ご存知やなんて」

あんたはんほどのお方やつたら…と、いつもの穏やかな表情で微笑

んでおっしゃいます。

「私らが何を頼みに来たか、なんて…とうにお見通しですやろ？」

『……………あの川のことが』

せつかくの美しい顔を歪めるようにして、不愉快そうな声を出す…

化人さま。

『人間になりたい、なぞ…愚かしいにも程がある。おぬしはそう思

わぬか？』

「さあ、私は人間やし…けど、ええお話や思いますけど？せつかく

のお力をこの小さな沼に留めておくのは勿体無い。こちらの川まで

勢力伸ばさはっても支障ありませんやろ？」

……………そう。

みこと姐さまと杏珠さまの『懸念』とは…『蜚様がいらつしやらな

くなつた後の川の蜚を誰が治めてゆくのか』というもの。

町から少し離れたこの沼の主である蜚の化人さまならば…と見込ん

で、お願いに伺ったというのが事の次第なのです。

『わしが申しておるのは…そのようなことではないわ』

「…はあ。では、どんな」

『あのような浮かれ心が未来永劫続くものと、おぬしは本当に信じ
ておるのか？』

………浮かれ心？

『人間の心は移ろい易い。あの若造を見よ、まだまだ親の脛を齧つ
ておるような青二才ではないか。所帯を持つなぞ…それだけでも夢
物語であるというのに』

慎一郎様の、気弱な笑顔が脳裏に浮かびます。

『それだけではない。化人が人間になれば…寿命は遥かに短くなり、
今持つている力も消えてなくなる…人間の生活に慣れるのに、戸惑
い迷うことも数多あるであらう。あの若造に、あの娘を支えてゆけ
ると申すのか？』

「…確かに、おっしゃる通りかもしれませんが…」

『娘もやがて年をとる…今の美貌がいつまでも続くわけではないの
だぞ？皺々の老婆になった娘を、若造はずっと愛し続けられると思
うか？』

みこと姐さまは…黄色く光る水面に視線を落とし、不意に黙ってし
まわれました。

どんなお考えでいらっしゃるのか…

長い睫毛を伏せたその表情からは、一切うかがい知ることが出来ま
せん。

『蛭様が人間になることが出来たら』

『二人が一緒になれたら』

そう思っているうちは、まだ…夢を見ているのだということ。

お二人の願いが叶う時…それは、夢が現実に成り代わる時でもある
のです。

今は想像もつかないような困難が、お二人の前に数多く立ちはだか
ることでしょう。

本当に、沢山の困難を乗り越えていくことが出来るのか？

化人さまのおっしゃっていることは…おそらく、そういうこと。
しばし、重苦しい沈黙が流れ。

みこと姐さまは視線を上げ、じつと…化人さまを見つめます。

「実は私も……………あんたはんと同意見でしてなあ」

……………え？

「今は甘い夢に酔いしれているだけや、その願いがほんまはどんなに重いことか…まったく分かってへん。二人が夢から醒めたとき…そんなこと、想像しただけでぞっとしますわ」

「……………左様か」

…そんな。

誰にだっていつだって、わけ隔てなく優しいみこと姐さま。

面白半分のつづみ姐さまと違って、本当にお二人のことを応援していらっしやるのだと…思っていたのに。

私は胸が痛むのを懸命に堪え、じつと姐さまの言葉に耳を傾けます。

「ならば、今すぐ戻ってあのまじないを止めさせぬか。あと一晩…さすれば願いは成就してしまうのだぞ？」

「…そうですね」

化人さまは、みこと姐さまの歯切れの悪いお返事に苛立つような表情をなさり、深いため息を一つ。

「かようなことを申してもそちらは…若いものに対する、老婆の嫉妬とも思っておるのだろうか」

「…別にそうは思てまへんけど」

いや思っておる、とおっしゃって…不意に寂しげな表情をなさいます。

「わしとて伊達に年は取っておらぬ。かような甘い夢を見たことも…無かったとは申さぬ。だが顛末は…見ての通りじゃ」

ずっと厳しい顔つきでいらっしやった化人さまは…ふっ、と優しい表情になり。

だからこそあの娘が気がかりなのだ、と…小さな声でおっしゃいま

した。

みこと姐さまは…

真剣な表情でお話到最后まで耳を傾け。

「あんさんの言わはることも…よう分かるけど」

不意にそんなことをおっしゃり、目を輝かせて…化人さまをご覧になりました。

「けど、だからこそ…あの二人に賭けてみようとは思わはりませんか？」

『ほう…賭けるとな』

そう、と頷いて、姐さまは未だ動けずにいる私を優しい眼差しでご覧になります。

と。

ふっ…と、金縛りが解けたように、体に自由が戻ってまいりました。ほつとため息をつき、ぺこりとお辞儀をする私に…こり微笑みかけ。

姐さまはまた、化人さまに視線を戻し。

「あんたはんはもしかしたら、むかあしそれは辛い恋をしはったのかもしれない。私かて…そうそう甘いもんやないことくらいは分かるつもりや。けど今度こそ！て」

ぽん、と小気味良い音を立て、両手を合わせておっしゃいました。

「そないな可能性に賭けてみる…いうんはどうですやるか？」

化人さまは、ゆっくりとした大きな身振りを交えたみこと姐さまのお話に、じつと耳を傾けていらっしゃいます。

「それに、あの二人ほんま真剣なんや…その上ああ見えてえらい頑固で。親兄弟や私や杏珠さま、それにあんたはんが言ったかて、聞く耳は持たへんやろ」

『だから…したいようにさせればよい、と申すのか？』

いいえ…と姐さまは穏やかな表情で、真珠の耳飾りを蛍の光に煌かせながら首を振ります。

「そついう投げやりな気持ちやのうて。私には…あの二人に、蛍よ

りずっと明るい希望の光が見えるような気がして」

「希望の………？」

思わずつぶやいた私に笑顔で頷き。

みこと姐さまは、はつきりとした声で…おっしゃいました。

「そうや、確信は持てへんけど…万が一の奇跡が起こって二人は幸せになるかもしれへんって。だから私、無理やて最初から決めてかかるんやのうて二人のこと…信じてみよう思てますんや」

化人さまはしばらく無言で、黄色に光る水面を眺めていらっしやいました。

ですが。

夜が明け始め、空が淡い紫色に染まりかけた頃。

晴れ晴れとした表情でゆつくりと頷き…こう、おっしゃったのです。

『承知した。私も信じてみようではないか。若く愚かしく、そして…この蛍共より明るい光に満ちた…二人を』

あくる日は真つ暗闇に包まれた、静かな夜でした。

神妙な面持ちで待つ、慎一郎さんの掌のその石は。

淡く鈍い…黄色い光を放っております。

月のやさしい光を映しこんだようなその色は、まるで蛍の輝きのようでもあります。

「月の光をいっぱいに吸い込んだあの石は、今日の暗闇を奇異に思い…近くの光を手当たりしだいに吸い込もうとするらしい」

頭の上からつぶみ姐さまの囁き声が降ってまいります。

「光を、ですか」

「左様。それ故ここに現れた蛍殿の光を、化人の力もろとも吸い込んでしまうのだと。光を吸って吸って腹いっぱいになった石は、天の昇って星になるそうなの」

「…素敵」

私は思わずため息をつき、声のほうへ視線を向けますが。

黒と藍の溶け合ったような闇の中で、隣に立つ姐さまのすがたはほ

とんど見てとれないのでした。

「なんせあの石、元々空に光る星だったのが光を失って落ちてきたものなのだから」

「本当ですか!？」

「ええ…杏珠さまが言うてはったんやもの。間違いない」

みこと姐さまも明るいい声でおっしゃいます。

杏珠さまは…

夕方ふらりとお出かけになったまま、未だ戻って来られません。

また、どこか遠くへお出かけなのでしょう。

姐さま方はさも当然のことのように振舞っていらっしゃいますが、私はいつも…少しだけ心配になってしまいます。

旅装束ではなく、いつもの更紗の着物姿で。

その上、今夜はこんな真つ暗闇なのですから。

いったい杏珠さまは、いつもどこへお出かけになっているのでしょうか。

どなたに会いに？

何をなさるため？

何にせよ、旅路でこのような不思議な物を見つけて持ち帰られているのは…確かなようです。

そんなことに思いをめぐらしつつ…蛸様をお待ちいたしました。が、待てども待てども…彼女は姿を現すことはなく。

「私…川まで様子を見に行つて参ります!」

痺れを切らした私は、小さな提灯を持つて川原へ一走りいたします。

「蛸様、いったいどこにいらっしゃるのですか!？どうか姿をお見せください!」

何度もお呼びしてみますが…川面はしんと静まり返り、蛸の微かな光が行き交うのみ。

「慎一郎さんがお待ちですよ!早くいらっしゃらなくては、夜が明けてしまいます!蛸様!？」

…そして。

彼女がやつと姿を現してくださったのは。

後から駆けつけたつづみ姐さまの、意地悪な一言の後でした。

「とうとう現れなんだの。最後の最後に怖気付いたか…いやはや思
つておった通りじゃ」

厳しいお顔できつ、とつづみ姐さまを睨み。

蛭様は悲しい目をして…慎一郎さんをご覧になりました。

『慎一郎さま…』

「蛭子！いったいどうしたんだ！？早くこつちへ」

『私は…一緒には参れません』

思いがけない言葉に…呆然と立ちすくむ、慎一郎さん。

「…なぜ」

『…聞いてしまったのです、昨夜』

祈願成就まであと一夜。

ふらりと街を歩いていた蛭様は、ふと…慎一郎さんのお宅の前を通
りかかったそうです。

『出て行け！！！！』

初老の男性が怒鳴る声と…奥方らしき女性がすすり泣く声。

『親の命に背き、どこの誰とも分からぬような娘を嫁にするなどと

…そのような世迷言を言う者なぞ、我が家には要らぬわ！』

『あなた…やめてください！』

『黙れ！お前なぞ勘当だ！！！！』

奥方が止めるのも聞かず、男性が怒鳴りつけた相手。

それは……慎一郎さんだったのです。

『どこへでも…好きなところへ出て行くがいい！！！！』

慎一郎さんは…

父上の荒げた声をじつと黙って…聞いておられたそうです。
そして。

二人に小さく、折り目正しいお辞儀をして…

どこかへ…消えてしまわれたのでした。

『お父様の決めた…お相手がいらっしゃるそうですね』
痛々しくも落ち着いた、蛍様の声が響きます。

『大事な縁談を断り、継がねばならぬ家も捨てて、私と一緒にと…
おっしゃっているのですね？』

「それも…聞いてしまったか」

だが、と…慎一郎さんはきっぱりおっしゃいます。

「そんなことより、私にとってはお前が大切だ。見ていてくれただ
ろう？この半月あまり、どれだけ一生懸命祈願成就の為に力を尽く
してきたか」

『ですが、私なぞのために…慎一郎様の幸せを壊したくはないので
す』

「…何を言っているんだ？私はお前が」

『本当に…宜しいのですか？』

彼女の問いかけの後。

ふっ…とひととき沈黙が流れ、川のせせらぎだけが優しく耳をくす
ぐりました。

『そんな風に全てを捨て、私と一緒に…あなたは本当に幸せ
なのでしょうか』

思わず、私は…

傍らに立っていた、みこと姐さまの着物の袖を掴みました。

『甘い夢』と『厳しい現実』。

彼女の口に乗った言葉は昨夜、姐さまと沼の蛍様のものと…全く同
じだったのですから。

『二人が夢から覚めたとき』

ぞつと背筋が寒くなります。

蛍様は…夢から醒めてしまわれたというのでしょうか。

お二人の願いは…やはり蛍のように淡く甘い夢だったというのでし
ょうか。

どうか私のことなぞ忘れてください、と囁くようにおっしゃる蛭様の頬を、一筋の涙が伝います。

『そして、お父様の跡を継ぎ……どうか穏やかに幸せに暮らしてください』

「……………蛭子」

『あなたが幸せで、笑っていてくださるのなら……私は……………辛くとも淋しくとも耐えられます！ですから』

慎一郎さんは、黙ったまま。

静かに……前に進み出ると。

蛭様の体を強く強く……抱きしめました。

「私には……耐えられぬ」

『……慎一郎様？』

「お前も知っているだろう。私は……お前が居なくては駄目なのだ」この半月の間。

夜は石に願をかけ、昼は父上の店の手伝いをして……眠る暇などほとんどなく。

朦朧とした意識でふと……思ったそうです。

『こんなことをして……本当に自分は幸せなのだろうか』

目を閉じると、心の奥底に潜む魔物が……耳の中で悪戯に囁くのだそうです。

『もう良いのではないか』

『願いが成就などするものか』

『成就したところでどうする？お前のような甲斐性無しが、蛭子を幸せに出来るものか』

『父上は決してお許しにはならぬだろう。親不孝をして彼女を不幸にすることが……本当にお前の幸せなのか』

首を振って魔物の声を振り払い、なんとか迎えることが出来た……今朝の日の出。

赤く染まる地平線を見つめ。

『願いが叶わぬなら、それでも良いではないか』

そんな思いが、胸の深い深い所からこみ上げてきたといいます。

『自分にとつて彼女がどれほどに大切な存在か、それが分かったただけでも大収穫だ』

そして…

「もし本当に蛍子が人間になれたなら…私は確かに甲斐性無しだが、何をしてでも蛍子を幸せにしてみせる。朝の白んだ空の下、そう…誓ったんだ」

だって、と…蛍様の髪を撫でながらくすぐったそうに微笑む、慎一郎さん。

「この半月…死ぬ思いだったのだぞ。正直自分でも、ここまで出来るものかと驚いたよ」

そう。

それほどまでに彼の愛は…強いものだったのです。

「お前は嫌かい？私と一緒になれば、食うや食わずの生活をせねばならぬかもしれない。たとえ貧しい暮らしになっても、一緒に…耐えてくれるか？」

愛する人の胸の中で、蛍様は涙を流しながら…小さく、頷きました。慎一郎さんは潤んだ瞳を空に向け、少しおどけた振りでもたお尋ねになります。

「だが…人間というものは厄介だ。腹が減っては苦しいぞ？それでも」

蛍様はくすくす笑いながら、今度ははつきりと…はい、とお答えになりました。

と……

ぎゅっ…と私の手を握る、冷たくて柔らかい手。はっとして見ると。

『な？大丈夫やったやろ？』

そんな風にみこと姐さまが微笑んで、私をご覧になっていました。私も少し胸のあたりが暖かくなり、姐さまに微笑み返します。

それと…ほぼ同時。

慎一郎さんの懷に仕舞われた石が、急に眩しい光を放ったのです。石がふわりと宙に浮き上がると、蛍様の体の光は一層増し。黄色い光が…周囲を包みこみます。

光の珠となった石は、音もなく高く高くへ舞い上り。

そのまま空に昇り…

黄色く輝く、小さなお星さまになりました。

辺りはまた真つ暗闇に戻り。

私はあわてて川の蛍の淡い光をたよりに、消えてしまった提灯に明かりを燈します。

呆然としたご様子で周囲を見渡し…眩暈を起こしたように、ふらつと慎一郎さんにもたれ掛かる…蛍様。

「蛍子!？」

「…少し……体が重くなったような気がします」

よく見ると顔色も悪いご様子で、少し心配になってしまいましたが。

「大丈夫。人間の体に馴染んでないだけや…じき良くなるやろ」

みこと姐さまは何でもないように、にこにこ笑いながら頷いていらつしゃいます。

つづみ姐さまも欠伸をしながら、よかつたではないかと、一言。

「これからは夜な夜な密会せずとも、四六時中一緒におれるのだから…せいぜい飽きて嫌気がささぬよう頑張るのだな」

……もう。

本当はご自分だつて嬉しいくせに…こんなおつしゃり方しか出来ないのですもの。

今度はそれが、蛍様にもきちんと伝わったようで。

まだ少しだけ青い顔で、微笑んで頷いていらつしゃいます。

「これからは二人の足で…しっかりと歩んで行くだよ」

突然聞こえてきた声に驚いて振り返ると。

杏珠さまが…初老のご夫婦を伴い、立っていらつしゃいました。

慎一郎さんは驚いたように目を見開いていらつしゃいます。

「父上…母上………」

これは…

驚いて黙り込んだ私達に、呆れたように笑いながら杏珠さまがおっしゃいます。

「夕刻散歩をしていたら声を掛けられてね。倅殿の奇妙な行動はこの館に出入りしているせいだと…お相手もどうやら、みことだと思っておられたようだよ」

「……私？」

きょとんとした目でご自身を指差すみこと姐さまを、つづみ姐さまはお腹を抱えて笑いながら見ておられます。

真つ赤になつて俯く慎一郎さんに、杏珠さまが優しい視線を向け。穏やかに諭すように…おっしゃいました。

「勘当になつたのはまあ、仕方がないかもしれない。だがね…一生を共にしようという伴侶を、一目くらい両親に引き合わせたとして…罰は当たらぬのではないか？」

慎一郎さんの父上は…苦々しい表情で、じっとこちらを見ていらっっしゃいます。

暗い表情で押し黙り、俯いている蜚様に。

何と声をかけてよいやら、という顔で…ご両親を見つめる慎一郎さん。

誰も何も言葉を発することが出来ず、張り詰めた空気が辺りを包んでおります。

今回ばかりは杏珠さまも、手助けはしてくださらないご様子で。

私は居た堪れない心地になつて…暗い地面に視線を落としました。

……が。

「そちらが…お前の大事な人なのかい？」

長い長い、重苦しい沈黙を破り。

堪りかねたように前に進み出た慎一郎さんの母上が…そう、お尋ねになつたのです。

はつと我に返つた様子で…大きく頷く慎一郎さん。

おい、と袖を引く父上の手を振り払い。

母上は蛍様に近づいて…深々とお辞儀をなさいました。

そして、涙を流しながら…おっしゃったのです。

「うちの息子を…慎一郎を、よろしくお願いします！見ての通り、頼り甲斐のない子ですが…どうか支えてやってください」

「お前！何を言っておるのだ！？」

怒鳴る父上をきつと睨んで、母上は蛍様の手をぎゅっ…と握り締め、目を細めました。

「こんなに綺麗な方だなんて…まるで夢でも見ているみたい。慎一郎、あんたに付いてきてくださる奇跡な方なんだから…末永く、大切にするんだよ」

「母上…」

「いい加減にせぬか！それとはもう、親子の縁は切れておるのだぞ！？」

父上の言葉に大きく首を振って、母上はきつぱりとおっしゃいます。「例え縁を切ったとしても、この子は私がお腹を痛めた一人息子なんです！妻になってくださる方によろしくとお願いするのは…当然のことじゃありませんか！？」

父上ははつとした顔で…声を詰まらせました。

「慎一郎…体に気をつけて、どうか幸せになっておくれ。私は毎日、あんたの無事を…仏様にお祈りしているからね」

慎一郎さんは、涙声で言う母上に…涙を流しながら答えます。

「はい！蛍子と…きつと、幸せになります。母上も…父上も、どうかご達者で」

「お前なぞに心配される筋合いはない」
低い声で呟くと…

父上はくるりと背を向けて、ぽつり…と、遠くの街の名をおっしゃいました。

「そこへ行けばわしの古い馴染みがある。勘当になった身とはいえ、今までわしが叩き込んでやった目利きが何かの足しにはなるである

う。訪ねてみるがよい」

「……………ありがとうございます！」

慎一郎さんと蛍様は去っていく父上と母上の背中に、いつまでも頭を下げていらっしやいました。

つづみ姐さまとみこと姐さまと一緒に…出来たばかりの、小さなお星さまを見上げます。

「どうやら、八方丸く収まったようだの」

しみじみと呟く…つづみ姐さま。

ええ…と頷いて、みこと姐さまがおっしゃいます。

先程別れたお二人の…幸せそうな笑顔が脳裏に蘇ってきました。

「石は元いた星の世界へ帰っていつて、二人は新しい道を歩み始める…か。なかなか詩的でよろしいやないの」

吹き抜ける涼しい空気を、胸いっぱい吸い込んで。

私はうーんと背伸びをいたします。

「あの石は元に姿に戻って…二人の守り星になったのですね」

私の言葉に、ふっ…と一瞬黙りこみ。

姐さまは怪訝そうな声で、ぽつりとおっしゃいます。

「夢…なかなか気の利いたことを申すな」

みこと姐さまはくすくす笑って…私達の顔を交互に見つめ。

帰るか、とおっしゃいました。

振り返ると、そこには主を無くした蛍達。

少し淋しげではありますが…来年はまた、別の化人さまがお世話してくださるのです。

今年のように沢山の黄色い光で、街のみなさんの目を楽しませてくれるでしょう。

『そして私は、川原の蛍を見るたびに、慎一郎さんと蛍様のことを思い出すと思います』

丁寧な字でそう締めくくられた夢の日記を閉じると。

館の庭には、いつの間に門をくぐってきたらしい……いづこがにこにこ笑って立っていた。

「なんや……来てるんやったら声掛けてくれたらよかったのに」

「ごめんごめん、と笑いながら、彼は縁側に腰かける。

「みことがすごく熱心に日記帳読んでたからさ、声掛けるの勿体無くて」

「……勿体無いて？」

「なんだか優しい目してて、すごくいい感じだったよ」

「……………」

私は返事をせずに、ふわふわした雲の浮かぶ空に目をやる。

全く……この子は。

こういう物の言い方が、一体どのくらい街の娘はん達を誤解させてるか……まるで分かってへんのやから。

「聞いた？反物問屋の若旦那が駆け落ちしたって」

「……へえ。お相手は誰なの？」

「それが誰もわかんないらしくてさ。街の人間じゃないらしいんだけど……なんだ。ちょっと妙な感じだったから、てっきり杏珠さまやお前達が絡んでると思ってたんだけど」

どうやら当てが外れたらしい……とつまらなそうに口を尖らせ。いづこもまた、穏やかに晴れた空を見上げる。

「……………馬鹿な奴だよ」

「……………そう？」

「そつだよ。あの慎一郎って男はこの街を出たことがないし、はつきり言って才覚があるとも思えない。それなのに、恵まれた環境を捨てて一時の感情に流されるなんて……身の程知らずもいいところだ」

……………そつ。

穏やかそつで情緒的に見えるが……本当はひどく現実的なのだ、いづこは。

「みこともそう思うでしょ？」

「……………そやなあ」

「だって、そういうのって…嫌いでしょ？それで、つづみはああ見えて好きだよな？情にもろいつていうか」

さすがに長い付き合いだけあって…よく分かってる。いつになく厳しい目をして、どっかで行き倒れになったりしなきゃいいけど…とつぶやく、いづこ。

「けど、同業のおつきい店に跡継ぎがおらへんようになって…あんなの実家はもつと繁盛するようになるんやない？」

跡を継ぐ気がないのは俺も同じだけどね、いつもの柔らかい表情になって笑うが。

また遠い目をして…いづこは唱えるように言った。

「本当…恋は人の心を惑わすんだな。そして人の一生を大きく狂わせる。そんなものに振り回されるなんて…愚かだよ」

「けど、そう分かっていても…どうしようもなく、恋してしまうものなんやない？」

だから、恋に『落ちる』というのかもしれない。

今朝まだ涼しい時分、一人で水晶玉に向かい。

あの二人の運命を占おうとして…やめた。

そんなもの、知らなくても良いではないか。

二人はあんなにも幸せそうで…明るい未来が待っていると、心から信じているようだった。

私なんかよりずっと長い長い時を生きてきた蜚の化人の決断が、そんなに軽いものであるとは思えないし…思いたくもない。

それに。

あんなに夢が嬉しそうだったのだ。それに…つづみも。

それに…杏珠さままで。

あの場に慎一郎の両親を伴って現れたのは…

『生涯を共に過ごす相手を、生みの親に一目遭わせても罰は当たらないだろう』

あの一言に…尽きるのだろう。

そんなことをぼんやり思った。

恐ろしいね、といづこは神妙な顔で頷く。

「恋心なんて、鍵をかけて蓋をして、どこかへ閉じ込めてしまえればいい…みことは知らないの？そういうまじない」

「…そんなん、あるんやろか」

そうだな、と笑い。

いづこは不意に真剣な表情になって、私を見た。

「……………え？」

「どうかした？」

「…いや」

本当に…どうしたんだろう。

今…確かに彼は、何かを私に告げたはずなのに。

「何や私…今あんたが何言うたか…聞こえへんかったわ」

「…嘘？」

「嘘やないて。だって…ほんまに」

私の言葉を、いづこは本気にしていならしい。

またそんなこと言っってはぐらかして…と笑って立ち上がり、館の外へと歩き出す。

「じゃあね、みこと…また」

「……………ええ」

いづこの去った、静かな庭を眺めながら。

私はぼんやりと…いづこの口の動きを真似、それを声に出してみた。

「『てがみがきたよ。げんきそうだった』」

多分…そう。

『みことは元気かって』

『心に鍵をかけて蓋をしてしまうまじない』…か。

どうやら私は知らないうちに…自分で自分にかけてしまったらしい。日差しの強く照りつけるようになった庭では。

人の気も知らないで…蝉が、元気な鳴き声を響かせていた。

第七話 道満さまのお話。

一生のほとんどを暗い土の中で過ごす、蝉たち。

つづみ姐さま曰く、土の中で十年あまりの長い年月を過ごすものもいるそう。

一夏の命を精一杯謳歌しようとしているその姿に、胸を打たれないでは…ないのですが。

「ったく、今日もあつついのお…」

開き気味にした胸元を扇子ではさばさ扇ぎながら、つづみ姐さまがぼやきます。

「ただでさえ暑いというのに、蝉が五月蠅いと余計に怠さが増す。そう思わぬか？夢」

「そう…ですなぁ」

確かに、姐さまのおっしゃるのも一理あるな、と…つい、思ってしまうのです。

館の門前に打ち水をする、瞬く間に微かな陽炎が立ち上ってすうっと涼しくなり、心地良い風が吹きますが…それもまた、一瞬のこと。

「ここらではあつと、涼しくなるような騒ぎでも起きんかの」

「物騒なこと言わないでくれない？」

不愉快そうに眉間にぎゅっと皺を寄せ、ゆづきさんがまっすぐこちらへ歩いていらっやいます。

「そんなに涼しくなりたいんだつたら、街の広場へ行ってみたらいじゃない」

遠い遠い北の街から、大きな氷の塊が届いたのです。

それは、『氷室』と呼ばれる冷たい洞窟の奥深くで保存されていたものだそう。

幾つも立ち並ぶ氷の柱は、広場の空気をぐっと冷やし…街の皆さんに大層喜ばれているのです。

「庄屋も考えたものだの。この暑さであればかなりの宣伝になるだろうからな」

「そうねえ。で、つづみは行ったの？氷はかなり大きいみたいだったけど…この暑さだもの、明日には溶けて無くなってしまいうわよ？」
馬鹿馬鹿しい…とつぶやいて、姐さまは着物の裾をばさばさ煽ります。

「この暑い中、わざわざ街の連中がそろそろいるような所へ行くものか。どうせ芋洗いに混み合っておって、余計に暑苦しゅうなって帰ってくるのがおちじゃろが」

「そう…かしらねえ」

そういえば…と、ゆづきさんが声を潜めておっしゃいます。

「その…氷なんだけど」

よくよく見ると、少々顔色が悪いように見受けられます。

「何か…おかしなものでも取り憑いているのですか？」

私の問いかけに…焦ったように笑って首を振り。

「いえいえ！取り憑いてるだなんてそんな…そんな…わけ、ないじゃない」

まるでご自身に言い聞かせるように呟いて、俯くゆづきさん。

ゆづきさんは人一倍に靈感が強いのだと、以前みこと姐さまに伺ったことがあります。

ですが……

彼女は人一倍に、怪談の類もお嫌いなのです。

ほお…といたずらっぽく目を細め、つづみ姐さまが彼女の顔を覗きこみます。

「本当かあ？今の件は確実に、わしが言った『ひやっとする話』に繋がっている気がするがのぉ」

「そっ…そんなんじゃないわよっ」

ゆづきさんは首を横に向け、つづみ姐さまから目を逸らし。

何か声が聞こえたような気がしただけ、と…独り言のようにおっしゃいました。

「声…ですか？」

「……………なんていうか…小さな女の子みたいな声が、ね」

「ぱちん、と指を鳴らして、それは決まりじゃ！とつづみ姐さまが笑います。」

「ゆづきに聞こえたというのなら間違いない！きっとその氷には、遊んでおつて氷室に閉じ込められて死んだ女童の怨霊が取り憑いておるのじゃろう」

「ばっ…馬鹿なこと言わないでよ！！そんなことあるわけないでしょうが！！！」

「いやあそうとも限らぬぞ？なんせ百鬼夜行なんてものも実在しておるのだからなあ」

「そっ…それは」

「そうと決まれば、のお夢！？」

「えっ……………何でしょう？」

「思わず嫌そうな声を出してしまう私にお構いなしで、つづみ姐さまは意気揚々とおっしゃいます。」

「今夜、街の連中が寝静まった頃にその氷の様子を見に行こう！となれば案内も必要じゃ、ゆづき！ぬしも一緒に来てくれるのじゃろう！？」

「……………あんた、何血迷ったこと言ってるのよ！？」

裏返った声で叫ぶ、涙目のゆづきさん。

「思い違いだつて言ってるでしょ！？私絶対絶対、ぜーったい行きませんからね！！！」

……………と。

そんな話をしていた矢先のことでした。

館の前の細い路地から、すうつと黒い影のような者が…姿を現したのは。

あれっ？と思つた次の瞬間。

大きな黒い影の塊はぬうつと通りに踊り出ると。

私達の居る『めいぼくそう』の門めがけ…物凄い速さで飛んで来たのです。

ひっ…と小さく悲鳴を上げ、顔を強ばらせる姐さまに。

「……………きゃあああ！！！」

ゆづきさんは…耳を劈くような悲鳴を上げ、取り縋ります。

逃げる暇もなく、悲鳴を上げる余裕もなかった私は…ただ、ぎゅつと体を硬くしました。

何なの？…これ。

みるみるうちに近づいてきた黒い塊が突如、大きな赤い口を開け、飲み込まれる！…思った。

その時でした。

「あんた達、お退き！！！」

門の奥から走り出てきた杏珠さまが、私達を後方に突き飛ばし、長い呪文を素早く唱え。

「往ね！！！」

黒い塊に…黄色いお札を突きつけたのです。すると。

大きな影の塊は、先程の陽炎のように…

しゅうつと空気に溶けて消えてしまいました。

それは…ほんの一瞬の出来事で。

「夢っ！？大丈夫か！？」

つづみ姐さまに体を揺さぶられ…はっと我に返ります。

「だ……………だい…じょうぶです」

震える声で答えると、はあ…と姐さまは大きなため息をつきました。

「ぬしは…立ったまま気を失っておったのか？」

「ち…違います！ちゃんと…見ておりました」

ゆづきさんは……………

地面にぺたりと座り込み、がくがく震えておられます。

騒ぎを聞きつけた街の人々が、どこからともなく集まってきて。

「一体何事だ？」

「何か…妙なものが今、ここを通ったように見えたが」

「いや…一体あれは何だ？」

ざわざわと…黒い影の化物の噂をしていらつしやいます。

杏珠さまは、興味津々の街のみなさんを冷たい目で一瞥すると。

低い声で、人ごみの奥の方へ向かい…おっしゃいました。

「隠れてないで出てきたらどうだい！？道満
すると。」

沢山の人の向こうから、愉快そうな笑い声が聞こえてきて。

「いやはや、見抜かれておったとは…さすがは杏珠じゃ」

人ごみをかき分け、現れたのは…

小柄な、年老いた一人の男性でした。

杏珠さまのお部屋で、二人は黙ったままじつと向い合っておられます。

「あの方は…どなたですか？」

襖の隙間から盗み見て、私は声を潜めて姐さま方にお尋ねします。

「いや…わしは知らぬ。みことはどうじゃ？」

「いえ…私も初めて会うわ、あの人」

「随分と、立派なご身分になったものじゃないかね、杏珠。あんなにべっぴんな占い師を三人も弟子に持つなんざ」

「…普通に占い師稼業やつてりや皆こうさね」

「師匠はどうしておられる？相変わらず山奥の隠居生活か」

「…まあ、お変わりはないようだが？」

「年はとりたくないものじゃのう。あのようにお力のあつた方が今では見る影もない。もう占いやまじないは一切なさっておらぬのか？」

「…さあね。気になるなら自分で様子を見に出向いてはどうかね。きっと師匠もお喜びになるであらう」

冷たいのお、と嘆くようにおっしゃる道満様をじろりと見据え。

杏珠さまは…目の前の畳をどん、と叩きました。

「そりゃあ命の次に大切な水晶玉を、一番弟子が盗まれてしまったんだからね！それ以来すっかりお気を落としてしまわれて…今じゃ、あの有様だ！お前さんは一体誰が原因だと思ってるんだい！？」
男性は大層驚いたようで、言葉を失い目を丸くнаさいましたが、すぐに…大きな口を開け、けたけたと笑い始めました。

占い師は、一人前になると同時に師匠から水晶玉を贈られるのが習わし。

占いを続ける限り、同じ水晶玉をずっと使い続けるのです。

占い道具を丁寧に扱わねばならぬの言うまでもないが、特に水晶玉は自分の命のように大事にしなければならぬ…と、杏珠さまにいつも言われております。

それに、使い込まれた水晶玉には、占い師の魂が半分移ってしまう…とも。

ですから、占い師をやめる…という時には、愛用の水晶玉を特殊な石の上に落として粉々に割ってしまうのが習わし。

そうすることで初めて、『占い師という業』から自らを解き放つことが出来るのだそうです。

『業』…というのも、私にはまだよく分かりませんが。

「あのじいさん…占い師なのか？」

訝しげに目を細めながら、つつみ姐さまが呟きます。

…そういえば。

「男の人でも占い師になれるんやね…」

初めて見たわ、とみこと姐さまも目を丸くしておられます。

「いや…祈祷師とか陰陽師とか、別の類のものじゃる。女でなくば占い師にはなれぬはず」

「けど…水晶玉がどうか、て」

相変わらず、杏珠さまは怖い顔で件の男性と向きあっておられます。

あんなに杏珠さまが感情を露になさることは、本当に珍しいことでありまして。

こんな風に戸惑っておられる姐さま方の姿も…普段お見かけする機会はございません。

私たちが覗いている襖の隙間から、みゃあ…と呑気な声をあげながら、みとが杏珠さまのお部屋に入ってまいりました。

こら、みとっ…と呼んでみるものの、彼女は我関せずといった風。男性が愉快そうな目をみとに向け…おっしゃいます。

「これはこれは、お主んとかじゃ飼ってる化け猫まで雌なのかい…ぎよっとして。」

私は思わず襖の影から飛び出して、みとを捕まえに参ります。しゃがみ込んでみとを抱きかかえる私を見下ろして…男性はにやりとなさいます。

「おやまあ、隠れるのはもう止めたのかい？お嬢ちゃん」
少し背筋が寒くなるのを感じながら…

私は自分に喝を入れ、きっぱりと申し上げました。

「みとは化け猫なんかじゃありません」

「…ほう」

「ほら、よくご覧になってください！ごく普通の、どこにでもいる三毛猫なんですから」

男性はきょとんとした目のみとをじつと見つめ…ちゃん、と鼻を突きます。

すると。

体の重みはそのままに…

みとの姿がふっ…と見えなくなっていました。

「えっ！？」

手や腕には…みとを抱いている手応えがあるのに。

「…これは」

「貴様っ、みとに何をした！？」

襖を開け放ち、つづみ姐さまが怒鳴ります。

「ちよつと、つづみ」

「うるさい、みことは黙っておれ！みとはわしらの大事な家族なのじゃぞ！？それを」

と……

みとのいなくなった空間から、みやあ、という呑気な鳴き声が聞こえてまいりまして。

男性は動揺する私たちを見て、げらげらとお腹を抱えて笑い出し。

「ほうれ見よ、やはり化け猫だったではないか！」

みとに化人さまの姿を見えなくする術を掛けたのだと、得意げにおつしゃいました。

……そんな術、初めて見た。

と、申しますよりも……

みとの『正体』を見破った方は、たとえ名のある占い師さまでも……今までいらつしやらなかったのに。

自分の姿が消えてしまっていることに気づいてか気づかずか、みとはみやあみやあと鳴き続けております。

真つ赤な顔でぐつと生唾を飲み込み、つづみ姐さまはみとのいる場所を指さしました。

「で……その術はどうやってたら解けるのじゃ！？早うみとを元に戻さぬか！？」

「まあそう怖い顔をするでないわ。綺麗な顔が台なしじゃぞ」

「なんだとこのクソジイが……！」

「ちよつと、それは言い過ぎやないの？」

「だあらみことは黙っておれと……」

「その……つづみにみこと申したかの？」

「……ああ」

不敵な笑みを浮かべる男性に、意気を削がれたご様子のつづみ姐さまが頷きます。

「のうつづみ、お主はわしをクソジイと申したな？」

「…………だから、何じゃ？」

つづみ姐さまの答えに突然笑い出した男性をじろりと一睨みして。杏珠さまが…呆れ顔でため息をつきます。

「つづみ…男の占い師がいるなんて、一体誰に教わったんだね？」

「…ええ。ですが…………まさかつ」

心臓が止まるかと思うほどの大声で、つづみ姐さまが悲鳴を上げます。

「こやつ…………女なのですか!？」

けらけら笑い続ける…『女性』に、また面倒そうな視線を投げ…杏珠さまが頷きます。

「まあ…………『元』と言ったようが正しいのかもしれないがね。道満は…私の姉弟子だよ」

道満さまは、占いの術を使って今のお姿になられたのだそうです。

そんなことまで出来るなんて…

占い師の力というものに、底の知れないものを感じます。

「しかし…何故男性になろうだなんて思われたのですか？」

透明なままのみとを膝に載せ、そんな風にお尋ねいたしますと。

道満さまはにやりと齒を見せて笑い…私をご覧になりました。

「夢の…お主は男になりたいとは思わぬのか？」

「…ええ」

信じられぬ!と大きな声でおっしゃって、道満さまは目を大きく見開いておられます。

「おなごというものは色々と不便ではないか!いつも男の後をついて歩かねばならず、地位も権力も皆、おなごには無縁のもの。いわばおなごは男の所有物だ、男の劣化した生物だ。そうは思わぬか？」

「……………そうでしょうか」

「そうじゃよ。だからわしは、おなごであることを止めたのさ」
だから…って。

呆然と見つめる私や姐さま方を見渡して、道満さまは依然高らかに

笑っておられます。

「おぬしら、男はいいぞお！酒も煙草も好きなだけ嗜める。化粧なぞせずともよいし、髪や着物や…色んな身なりを気にすることもない。それに…」

そして、ぐつと声を潜め…人差し指を立て。

「おぬしらには分からぬであろうが……男の手で触れる若いおなごの肌というのは…また格別のお」

……ぞくつ。

「きつ…きつ……きさまっ…おなごを…抱く…のかっ!？」

仰け反ったつづみ姐さまが、裏返った声で叫びます。

さすがのみこと姐さまも、口に手をあて…青い顔で言葉を失っておられます。

道満さまは……

予想通りの反応だったようで、さあどうかのう、とけらけら笑っておられます。

「どう…どうかのうではない！何と言うか………そつ、そうじゃ！…貴様のような小汚いじーさんに抱かれる娘なぞ、一体どこに」

「知らぬのか？世の中にはわしのような小汚いじーさんに抱かれることを生業としている娘衆もおるのじゃぞ？それに、おぬしには申し訳ないがわしは意外にもててのう。金もあつて偉い占い師様とあれば、別嬪さんが向こうから言い寄ってくるわい」

「けっ…けしからん！そんなものは………」

真つ赤な顔で怒鳴る姐さまを、道満さまはにやりと笑つてご覧になります。

「なんじゃなんじゃ…生娘のように動揺しおつて。おぬし、見かけによらず初心じゃのう」

「………なっ!？なんだと!？」

怒り心頭に発し掴みかからんばかりのつづみ姐さまの体を、みこと姐さまが背後から必死で押さえておられます。

「離せみこと!こんな無礼なことを言われて黙っておれるか!？」

「ええから！ちょっと落ち着きなさいて」

「ええい離せ！このクソジジイが何を」

その時こほん、と大きな咳払いが響き。

部屋がしんと…静まりかえりました。

引き攣ったこめかみに手をやり、杏珠さまが低い声でおっしゃいます。

「道満…いい加減に、うちの若いのをからかうのは止めてくれないかい？」

しかし。

道満さまに悪びれるご様子は一切ございません。

「気に入った」

「…何だつて？」

「杏珠が弟子を持ったというので、いつか見に来ねばとは思ってたが…石頭の杏珠の弟子の割には、なかなかどうして面白い娘達ではないか」

『石頭』がお気に障ったのか、杏珠さまのこめかみがまたひくつ…と動きます。

「どうじゃ、一つ…勝負をせぬか？」

「…勝負？」

「実は、今日参ったのは他でもない…珍しいものが手に入ったのでおぬしに見せようと思つてな。だが、ただ見せるのではつまらぬ」立膝をついた道満さまは、膝頭をぽんと叩きます。

「そこで、おぬしの弟子の占い師どもじゃよ。わしの宝はこの街のとある所へ隠してある…こやつらに見つけ出すことが出来たなら、それをおぬしに進ぜようではないか」

杏珠さまは呆れ顔のため息をつき、髪に手をやります。

「お前さんの宝なぞ…どんなものかも分からぬうちから、欲しがる輩がどこに」

「もし、明朝までに見つけ出すことが出来なったら」

道満さまは、にやりと笑い舌なめずりをして。

低い声で…おっしゃいました。

「この街に…かわずの雨を降らしてやろう」

思わず…息を飲みました。

かわずの…雨。

想像しただけで、背筋がぞぞ…と寒くなります。

「どうじゃ？杏珠。乗るか乗らぬか、決めるのはそなたじゃぞ」

訝しげな目つきで…杏珠さまはしばし、道満さまを見据えておられました。

「つづみ、みこと、それに…夢」

私たちははつとして、はい！と声を揃えてお返事いたします。

「どうだい？この勝負…受けるか受けぬか。あれはああ言っているが…私はお前さん達に任せようと思うが」

「お受け致します」

間髪入れず、厳しい表情のつづみ姐さまがおっしゃいます。

ちよつと姐さま…と袖を引く私など、視界の隅にも入らないご様子。「ご安心を。決して、杏珠さまに恥をかかせるようなことはいたしません故」

そのお返事に一切表情を変えない杏珠さまと、手を叩いて笑う道満さま。

「…つづみっあんた」

「つづみ、本当にいいのだね？」

「お任せください」

「つづみ姐さまっ！？」

「これは愉快愉快！本当に受けるとは思わなんだ…つくづく面白い娘じゃわい」

「黙れ生腐占い師が！」

そう。

つづみ姐さまは…一旦口に出したことを、周囲が止めたからと言って引っ込めてしまうような方ではないのです。

「相当な自信のようじゃが、おぬし…もし出来なったら、師匠の顔

に泥を塗ることになるのじゃぞ？」

「ぬかせ！ぬしの妖しい術を見抜くのなんぞ朝飯前じゃ。もし出来なんたら、かわずの雨の降る表で裸踊りでも何でもしてやるわ！」

「これこれ…生娘が裸踊りなどとはしたないことを申すものではないぞ」

「うるさい黙れ！！！」

だん、と足を踏み鳴らし。

拳を握り、鼻を膨らませて…つづみ姐さまは高らかに宣言なさいました。

「ぬしの宝、このつづみが夜の明ける前に見つけ出してくれる！！！」

道満さまが楽しそうに体を揺すりながら、赤い夕日の中に消えて行くのを見送り。

「あんな安請け合いして…良かったのかい？つづみ」

杏珠さまがぼつり、とおっしゃいます。

当然です！と自信満々のつづみ姐さまに…

私は、ふと頭に浮かんだことをお尋ねしました。

「その…つづみ姐さま」

「なんじゃ？夢は不服か」

「いえ、そうじゃないんですが、あの……この勝負、道満さまは何も損をなさらないのではありませんか？」

「……………何？」

「だって…宝とおっしゃってましたけど、ついこの間手に入れたものなのでしょう？それなら惜しいと言っても懐が痛むようなものではないでしょうし」

それに、先程杏珠さまがおっしゃった通り、どんなものかも分からないのです。

もしかしたら『宝』というのは名ばかりで、厄介事を杏珠さまに押し付けようとなさっただけ…ということも考えられるのではないで

しょうか。

そう申し上げますと……つづみ姐さまの顔が青くなり、先程までの威勢がみるみる萎んでいくのが見て取れました。

いつの間に術が解けたのか、姿を現したみとがみゃあ……と大きな欠伸を一つ。

呆れ顔でため息をつく杏珠さまを見て……姐さまは弁解するように慌てておっしゃいます。

「まっ……まあ……私たちが勝てばあいつに吠え面をかせてやることは出来るし……要は負けさえせねばよいのだ。なっ、夢！そうじやろー！？」

「……そうですね」

そうと決まれば話は早い、と私の腕を掴んで館の戸口へ向かうつづみ姉さまでした。

「……みこと」

「……なっ……何？」

「何？じゃなかるう。早くせねば夜になってしまっぞ？」

「……私も……行くの？」

「……何を言うておるのじゃ！？当たり前じゃろ」

冷めた目をした杏珠さまと、訝しげに眉を顰めるつづみ姐さまに……体を縮めて手にした水晶玉に身を隠すようにして……みこと姐さまはか細い声でおっしゃいました。

「私……蛙……駄目やねん」

勢い込んで、街へ飛び出した私とつづみ姐さまでしたが……

突然持ち上がった『宝探し』は、困難を極めるものとなりました。

なんせ『宝探し』の『宝』がどのようなものか、何の手がかりもないのです。

どんな大きさのものなのか、どんな形のものなのか……

敵は自称『偉い』占い師さまですから、捜し物はつづみ姐さまの水晶玉にも映りません。

とりあえず姐さまの『占い師の勘』とやらに従って、東に向かって走りましたが。

それらしいものはこれといって…見つからず。

「あの派手好きそうなじじいのことだ、きっと目立つものに違いない！」

気を取り直した姐さまの次の直感を頼り、手分けして町中を探しまわることになります。

私は南から時計回り、姐さまは反時計回りに。

背中合わせに立って、ふう…と大きく息を吸い込みました。

「よい夢！普段見慣れぬものがあつたらすぐ、私を呼ぶように」

「はい！」

「それは何か馬鹿でかいものかもしれんし、金か何かのようにきらきら光るものかもしれんし…とにかく何だか分からぬが、神経を研ぎ澄まして臨むのだぞ！」

「はい！」

よし、と大きく頷いて。

つづみ姐さまは勇ましい声で叫びました。

「では、解散！！！」

第八話 道満さまの宝探しのお話。

駆けまわる街は、いつも通りののどかな様子です。

他の街からやってきた商人達が、手ぬぐいで汗を拭き拭き通りを行き交い。

商店の前では安いよ、上物が入ったよ、という活気のある声が飛び交っています。

路地では子供達が鞠突きをしたり、鬼ごっこをしたり。

賑やかな笑い声は楽しげに、小さな通りにこだましています。

「夢ちゃん！そんなに急いでどうしたんだい！？」

魚屋のおかみさんに声を掛けられ、ぎこちなく笑ってお答えします。

「ええ………ちよつと」

「なんだ、まあ怖いお師匠さんや姐さん達にこき使われてるのかい？」

「いえ……そういうわけでは………」

「今度うちに連れておいでよ！私がつんと言ってやるからさ！」

拳を握って言って下さるおかみさんにぺこりとお辞儀をして、私はまた走り出します。

目に入るのは、いつも通りの街にいつも通りの人。

見慣れないものなんて全く………

「夢、夢……！」

街を半周して、私はとうとう何も見つけられないまま……つづみ姐さまと再会してしまいました。

「どうじゃ！？」

「……いえ。姐さまは？」

厳しい顔で首を振り。

爪を噛んで、つづみ姐さまがぼりりとつぶやきます。

「これでは……埒が明かぬかもしれんな」

「……もう、だから申し上げたじゃないですか！？」

じりじりと照りつける陽射しが肌を焼き、焦る頭からは湯気でも出てきそう。

「駄目じゃ！こんなに暑いのはいい頭も働きようがない」

弱気になり、大きく頭を振る姐さまの着物の袖をぐい、と掴みます。「そんな、急に諦めないでください！街の皆さんの平和がかかっているですよ！？」

蛙の雨が降る…なんて、考えただけで……

みこと姐さまでなくとも…寒気がします。

長閑な街はきつと、大混乱に陥ってしまうでしょう。

一体……どうしたら。

「つつみ！」

背後から声が掛かり、振り返りますと。

道の向こう側から、半泣きのゆづきさんがこちらへ走っていらつしやいました。

不愉快そうに眉を顰め、ぎよろりと彼女を睨みつける…つつみ姐さま。

「何じゃ何じゃ！？なっさけない顔をしておって」

だって…と一瞬ためらうように体を小さく縮めると、ゆづきさんはぎゅっ…と姐さまの腕に抱きついて、小さく震えながらおっしゃいます。

「あのねつつみ…やっぱり何かおかしいの」

「ああ！？何がじゃ」

「だからあ、さっき言ったでしょ！？…一緒に行つて見て頂戴、この通り！一生のお願いだから」

どうやら…『氷から聞こえる声』のお話のようです。

氷柱の周りは黒山の人だかり。いつスリや喧嘩があってもおかしくありません。

ですから、警察の方は交替で氷の周りを警備しておられるそうなのですが。

他の方には全く聞こえない…その『声』が、気になって気になって。

ゆづきさんは仕事にならず、困っておられるのだそうです。

「ええいうるさい！」

腕を大きく揺さぶってゆづきさんの手を振りほどくと、つづみ姐さまは夢、行くぞ！と大きな声でおっしゃいました。

「ぬしはおまわりなんじやろうが！？そんな些細なことであつたえ
ておつてどうする！？」

「……………そんなこと言われても…苦手なものはしょうがないじゃない
い」

「ったく…私は忙しいんじや！どうしてもというのならば、みことを
連れて行ってくるがいい！」

「あつ…待ってください、つづみ姐さま！」

慌ててゆづきさんにお辞儀をして、駆け出した姐さまの後を追いま
す。

背中聞こえる薄情者！というゆづきさんの悲しげな叫び声に、後
ろ髪を引かれますが。

「夢！今はあんな臆病者にかまけている場合ではないんじやぞ！」

「…そうですね」

ゆづきさんもお気の毒ですが、今はとにかく…

空から降り注ぐ数多の蛙。

そんな悪夢から…街を救わなくてはならないのです。

みこと姐さまは館の一番奥のお部屋で、暗がりの中…水晶玉を覗い
ていらつしゃいました。

「外には出られへんけど…ほんのちよつとでも、役に立てへんかな
あと思て…な」

震える声でおっしゃる姐さまは、顔色が優れないご様子です。

「で、何か映つたのか！？」

勢い込んでつづみ姐さまがお尋ねになります。

申し訳なさそうに、みこと姐さまは小さく首を振りました。

「なんせ…杏珠さまの姉弟子やし」

「あれのどこが『姉』弟子じゃ!？」

「でも、そうなんやろ?…なあ、つづみ?やっぱりあの人に『すいませんでした』って…謝らへん?」

目を大きく見開いて、つづみ姐さまは素っ頓狂な声で叫びます。

「何を馬鹿なことを言うておるのじゃ!？あんな助平じじいにコケにされて黙っておつては、杏珠さまの弟子の名が廃る!」

「けど…どうやって」

「絶対に!ぜーったいに何か手がかりはあるはずじゃ!!!夢!」

「…はっ…はい!」

みこと姐さまの弱気なお言葉に、『自分がしつかりせねば』とご自身を奮い立たせた様子。

ぐいと私の腕を掴んで、姐さまはまた勇ましくおっしゃいます。

「もう一度、今度は目を変えて逆に回るぞ!」

「…また…行くんですか?」

当たり前じゃ!と鼻息の荒い姐さまに…逆らえる筈など無く。

私は再び玄関へ出て、下駄に足を突っ込みました。

と……

「お前達、済まないねえ…うちのしょうもない姉弟子のせいで、面倒な事に巻き込んでしまつて」

珍しく元気の無いご様子の杏珠さまが、そんな風に私たちにお声を掛けてくださいました。

「杏珠さまにも…分かりますか!？」

つづみ姐さまの言葉に、そういう訳じゃないんだけどね…と杏珠さまは言葉を詰まらせます。

「でしたら、何故教えてくださらぬのです!？」

「いや…この勝負には占い師の面子が掛かっている。教えてやりたいのはやまやなんだが…教えたことはたちまち道満にばれてしまつたろうし、そしたら…きっと話に尾鰭がついて角までついて、私達は占い師仲間達からどんな謗りを受けるか分からないからね」

…………それは、大変。

つまりは…やっぱり私達が、自分の力で見つけるしかないってこと。揃って深い溜息をついた私達を慰めるように、杏珠さまは私達の肩をぼん、と叩きます。

「だけど…お前達の想像、方向性は間違っちゃいないと思うよ」

「…方向性…ですか」

そう、と頷いて。

杏珠さまは消え入るような声でそっと…おっしゃいました。

「あれは天下きつての派手好きだ…だから『宝』とやらも…やたらと人目のある所にあるに違いないと、私は…思うよ」

「そうは言われてものお」

街のはずれの小さな竹林で、さらさらと笹の葉が擦れ合う涼し気な音に耳を澄ませながら…つづみ姐さまが呟きます。

「あんな遠まわしな言い方をされても、皆目見当がつかぬではないか。なあ夢」

「…ええ」

再び街を足を棒にして歩きまわり一通り回りつくした所で、突然姐さまが『確か、竹やぶがなんとかと言っな!？』とおっしゃり…ここまで走ってきてみたのですが。

「あの…つづみ姐さま？」

『地震の時は竹やぶに』では？とお尋ねする私の言葉を遮り、苦い顔をして頷くつづみ姐さま。

「…わかっておる。たった今、思い出したところじゃ」と…その時です。

不意に強い風が吹き、竹林の笹の葉がさわさわざわざわと一斉に音を立て始めました。

その音は次第に大きくなり、そして…

突如、人の声に変わったのです。

『いやはや愉快愉快!大層困っておるようだのお』

「貴様…道満か!？」

姿の见えない道満さまが、さも楽しそうに笑いながらおっしゃいます。

『ちと、頭を冷やしてみてはどうじゃ？頭に血が上ってしまつて、余計に動きが鈍くなるぞ？』

『うるさい！！』『余計に』は、余計じゃ！！』

『そろそろ日も暮れる。暗くなつたら、宝探しも辛くなるであらうなあ！』

『大きなお世話じゃ！！！』

真つ赤な顔をした姐さまの怒鳴り声に、また楽しそうに笑う…道満さま。

『せいぜい頑張つて探すのだな。杏珠の弟子というからそれなりに期待しておつたのに、ここで終わつてしまつてはつまらん』
そして…囁くような声が竹林に響きます。

『手がかりが欲しいか？』

『そんなものは要らぬ！誰が貴様なぞに』

『木を隠すなら森…じゃよ』

『…森？』

『おっと、口が滑つてしまつたわい…では、健闘を祈る』

『待て！それは一体どういう意味じゃ！？』

途方に暮れた私達を、更なる謎の中に閉じ込めたまま…

道満さまの笑い声は、竹林のざわめきに消えていきました。

薄暗くなつた街の中を、棒のようになつた足を引きずるように…

二人並んで、とぼとぼと歩きます。

蝉達は遠くでまだ元気な鳴き声を響かせており、肌着は汗ばんだ肌に張り付き…不快な暑さが増すように感じられます。

つづみ姐さまは、ふう…と深い息を吐いて、不意に道の真中で立ち止まり。

両方の拳で、ぽかばかと自分の頭を叩き…嘆くようにおっしゃいました。

「あーもう駄目じゃ！こう暗くなっちゃって手は打ちようがない」

「そんなに投げやりにならないでください…街の皆さんの穏やかな朝がかかっているんですよ？」

「だが、何周も何周も街を駆けずり回って、奇妙に思われるのも承知で聞き込みまでしたが…結局『宝』の『た』の字も手がかりがなかったではないか」

「そう…ですけど」

嘆く姐さまの肩を、そっぴと元氣良く叩きます。

「あの道満さまのお言葉はどうです！？あれを糸口にしたら…もしかしたら、『宝』に近づくことが出来るかもしれませんよ！？」

そんなことを言ってもなあ…と呟いて、姐さまは額に手をやります。「木を隠すなら森…などと言われても、そもその『木』がどのようなものか分からぬのに、森も何もないではないか」

そう……か。

「あーもうどうしたら良いんじゃ…みことは怯えて館の奥に引込んだまま出て来ぬし、みとを連れて来てまた何か悪戯されては困るし、いづこやゆづきは何の役にも立たぬし」

頭をぽかぽか叩くつづみ姐さまは、まるで小さな駄々っ子のようにです。

「つづみ姐さま…元氣出してください」

すまんの…と少し涙目になった姐さまが私の顔をじつと見つめます。

「こんな不甲斐ない私についてくれて…本当に夢は出来た妹弟子じゃ」

「…そんなこと」

「あああ何で私はいつもこう、肝心な時に限って駄目なんじゃろ…こんなことでは杏珠さまの弟子などと名乗る資格はない…信じてついてきてくれた夢にまで恥をかかせてしまって…もう…私は占い師失格じゃ」

私は…つづみ姐さまに気づかれないうちに、小さくため息をつきま

した。

そう。

つづみ姐さまは時々ひどく落ち込むと…このように自信を無くしてしまわれるのです。

もうすっかり日も暮れたというのに、じめじめした生ぬるい風が、道端の柳の木をふうつと揺らして通り過ぎます。

「そんなことはありませんよ、つづみ姐さまはすぐ頑張っているじゃないましたもの…杏珠さまもきつと、分かってくださいます」

ここはもう…杏珠さまにお知恵を借りる他ない。

そんな弱気が体中を支配しそうになった…その時です。

今まで吹いていた生ぬるい風が止み、不意に違う方角からひんやりとした空気が流れてまいりました。

驚いて振り返ると…

そこは、件の広場につづく細い路地。

そういえば…氷室の氷の傍、あんまり調べてなかったかもしれない。だって、いつも街の皆さんでいっぱいだったのですもの。『何か捜し物かい?』なんて訊かれた日には、なんとお答えしてよいやら…と思っていたのです。

「つづみ姐さま………氷のある広場へは？」

「………いや、遠目に何度か見ただけじゃ」

つづみ姐さまも、焦る気持ちで人ごみに揉まれるのはお嫌だったのかもしれない。

ことりと首を傾けて、訝しげな顔で腕組みをなさいます。

「じゃが…特にこれといって目立つものはないように思ったぞ? あるのはあのでかい氷の塊だけで」
そこまでおっしゃって。

『あ』という表情で固まる…つづみ姐さま。

『少しは頭を冷やしてはどうじゃ?』

道満さまの言葉が耳をよぎります。

顔を見合わせ、頷き合つと…

私達は広場に向かって、薄暗い路地を駆け出しました。

周囲の家の小さな窓からは、暖かな夕餉の匂い。

『氷の塊から女の子の音がするの』

ゆづきさんの心細そうな声。

「きつとそうじゃ！あの氷に何かある」

元気を取り戻したつづみ姐さまが目を輝かせ、はつきりとした声でおっしゃいます。

頷きながら、私は…もう一つの謎を思い出します。

『木を隠すなら森』

あれは…どういう意味かしら。

遙か北の街から届いた氷は、即席の小屋の中に静かに収められておりました。

鍵のかかった小屋の周りには人氣がなく…しんと静まり返っています。

薄い板の隙間からは、冷たい風が流れて来て。

そして……

「ゆづきの…言った通りじゃの」

私は頷いて、ごくりと唾を飲み込みました。

まだ年端もゆかない小さな女の子らしき泣き声も…小屋の戸板の隙間から、微かに漏れ聞こえてくるのです。

「どうしましょう…杏珠さまをお呼びしたほうがよろしいでしょうか」

「いや、その必要はない」

きつぱりと言い切って、つづみ姐さまは袖の中からごくごくそと二枚の紙片を取り出します。

「姐さま…それは？」

「魔よけの札じゃ。夢はそこで見ておれ」

姐さまは髪どめの針金で、戸にかけられた錠としばし格闘しておりました。

今日一番に引き締まった表情で、ゆつくりと…小屋の戸を開きました。

すると。

目の眩むような青白い光。

全身が不意に凍りつくような、冷たい冷たい強い風。

そして…

そこに立っていたのは、白い緋の着物を着た…小さな女の子でした。真つ白な髪は柔らかに波打って、小さな肩にふわりと掛かっており、涙を湛えてこちらを不思議そうに見つめる瞳は、空よりも海よりも深い青。

ぽかんと口を開けているつづみ姐さまの袖を引っ張り、化人さまでしようか…とお尋ねしますと。

姐さまは呆然とした表情のまま、ゆつくり首を振りしました。

「いや………それにしては、気配が違う」

「じゃあ…一体」

その時です。

後ろから、ぱちぱちと手を叩く音が聞こえてまいりまして。

姐さまと同時に振り返りますと…そこには。

「二人とも、よくぞここまでたどり着いてくれた！」

満足そうな笑みを浮かべた杏珠さまが…ばつの悪そうな顔をしたみこと姐さまを背後に従え、立っておられました。

「あ…杏珠さま！？一体これは」

「さつきも言つたろ？私には『宝』の在処がわかるって。おいそれと教えてやるわけにもいかないし、かと言ってかわずの雨なぞ御免だしねえ…どうしたものかと思っていたが」

いつになく上機嫌な様子で、ぼん、と私達の肩を叩きます。

「本当に、あんた達は大したもんだよ！私も鼻が高い！！！」

にこにこ頷く杏珠さまの後ろから、みこと姐さまがちょこんと顔を覗かせ、両手を合わせて気まずそうに笑っておっしゃいます。

「今日のこと…私何の役にも立てへんくて…二人とも、堪忍な」

「なあに気にするな！」

『みことの馬鹿者が！』と…あんなに怒っておられたのに。

つづみ姐さまは、上機嫌にみこと姐さまの背中をバシンと叩きます。
「人間誰しも得手不得手がある！これがかわずでなくて蝸牛だったら、私もお前のようになっていたかもしれないからな」

すっかりいつもの調子に戻ったつづみ姐さまが、けらけら笑う…その最中。

『それならば…次は蝸牛にせねばなるまいの』

どこからともなく聞こえてきたのは…道満さまの声でした。

とは申しまして…姿はどこにもありません。みとに使ったのと同じような術で、姿を消していらっしやるのでしょうか。

『『宝』は見つかったようだの』

「あつ…当たり前じゃ！ぬしのような外道占い師の思惑なぞ全てお見通し…」

『ほう。さつきは随分とお困りのようだったが？』

「そ…そんなもの、ぬしを油断させる作戦じゃ！のう、夢！？」

「…えっ？…はい」

そうかそうかと笑って、道満さまは杏珠さまの名を呼びます。

『宝物はお気に召したかの？』

「…この子。一体どうするつもりなんだい？」

『それは…当初の約束通り。宝を見つけたのはそなたの弟子達じゃ…そなたに進ぜよう』

「ちよつと…お待ち…！」

杏珠さまの呼ぶ声に答えることなく、道満さまの高らかな笑い声は…夏の空に消えていきました。

不意に水を打ったような静けさに包まれた、氷の小屋。

「ママ？」

どきりとして振り返ると。

小さな女の子が青い目を大きく見開いて、つづみ姐さまの着物の袖を引っ張っています。

「…何じゃ？」

「…ママ！…！」

嬉しそうにしがみついた女の子に困惑した様子で、姐さまは杏珠さまに助けを求めます。

「な…何なんです！？この」

「ママー！」

「…と…言うのは」

「ママってのは、あれだ…異人さんの言葉で『おっかさん』のことだよ」

「…母親あ！？」

顔を真っ赤にしたつづみ姐さまは、それはもう…大慌て。

「離せ！私はぬしの母ではない！」

「ママ？」

「うるさい、ママではないと申しておるだろう！」

逃げる姐さまを、さっきまで泣いていたらしい女の子は、満面の笑みで追いかけます。

「ママ！」

「よせ！ついて来るでない！！！」

「ママー！！！」

二人をただ呆然と眺めておりましたら、ぽん…と優しく肩を叩く気配。

「よくやってくれたね…夢」

…杏珠さまでした。

「思い立ったら一直線だが…心根は脆いあの子のことだ、どこかで投げ出してしまうのではないかとひやひやしていたんだよ。けどお前さんのお陰で…なんとか投げ出さずに来ることが出来たようだ」

「…そんなっ…私、何もしてません！」

いや違う、と杏珠さまはにっこり笑って首を振ります。

「夢の手前、姉弟子の自分がしっかりせねば…と。あの子はそういう性質だろ？」

「そ…それは…そうですね、でも」

「杏珠さまー!？」

はっとして見ると、つづみ姐さまは纏わりつく女の子をついに観念して抱き上げ、依然困った顔のままこちらを見ていらっしやいました。

「おやおや…つづみ、なかなか手馴れたものじゃないか」

「からかわないでください!で………この子は、一体何者なのですか？」

『瑠璃ちゃんは、雪の化人さまと船乗りの異人さまの間に生まれた子供なのだそうです。お父さんは彼女の誕生を知らぬまま船で故郷に帰ってしまい、悲しみにくれたお母さんは、小さな瑠璃ちゃんを置いてどこかへ行ってしまったのだとか』

夜半になって降りだした雨が、肌を冷やして心地良い。

『ひとりぼっちの瑠璃ちゃんは、私達に出会うまでずっと氷の傍で泣いていたようです』

ふと誰かの気配を感じて、丁寧な文字の並ぶ夢の日誌から顔を上げると。

みことがにつこり笑って、こちらを見つめていた。

「…何か用か？」

「いえ…けど、なんやあんだ…変わったな」

「…そうか？」

「あんなこと言うなんて…びつくりしたわ」

『子を捨てるなど、そのような女に母親の資格はない!』

思わず怒鳴った私を…夢は、ひどくしょんぼりした目で見ていた。日頃は母親のことなど知らぬ存ぜぬ、という顔をしておきながら…やはり、気にはかけているらしい。

「母のない子なんてそこらじゅうにいてるんや、気にすることないて…あんたやったらそう言う思たんやけど」

「それはそうじゃが…」

あんなに小さな子供が、たった一人で生きていかねばならないなんて。

やはり… 可愛いそうではないか。

「まあ、母のない子なんは… お互い様やけど」

「… そうだなあ」

霧のような雨がしとしと降りてくる、暗い空に視線を向ける。

母親と別れたのは確か、瑠璃と同じくらいの年だった。

ママ、と嬉しそうに抱きついた彼女の笑顔を思い出す。

そりゃ、母親の顔など… 覚えていなくて当然か。

「そういえば… 杏珠さまのお母さんの話で、聞いたことないなあ」

同じようなことを考えていたらしい同類のみことが、不意にそんなことをつぶやく。

「確かに… 腹違いの弟さんの話ならまあ、何度か聞いたことはあるがな」

「ほう。お主らは知っておるのか」

思い出したくもない声に、うんざりして庭に目をやると。

庭の片隅に、道満が濡れそぼった姿で立っていた。

「何の用じゃ？ もう宝探しごっこは懲りたじゃろ」

「いやなに… お主らにどうしても聞いておきたいことがあつての」

仏のように穏やかなみことも、さすがに小さくため息をついている。

「で… 何ですの？」

「さっきお主らが言っておったことよ。その、杏珠の弟の話だ」

「… だから一体」

「お主らは、わしのことをさんざん『異形』扱いしておったが」

得意そうに語る彼の白い髪からは、雨の雫がぼつりぼつりと落ちており。

長い前髪の間から、きらきらした目が… こちらをじっと見据えている。

「お主らは… 師匠に何も違和感を感じぬのか？」

「… 杏珠さまに？」

「左様。その話を知っておるなら…異様と思うであらう?」

思わず、みことと顔を見合わせ。

「いえ…何にも」

「私も同意じゃ」

あつさりと首を振る私達に、彼は…さも愉快そうな顔で頷く。

「だいたい…私達が一体いつ、ぬしを『異形』なぞと申した?被害妄想もいいところじゃ」

『男になった占い師』が珍しいとは言った。が…『おかしい』などと言った覚えも、思った覚えもない……心外な。

「私ら、杏珠さまにいつも言われてますんや。客人はんにはいろんな事情持った人がいてはる、あの人はおかしいとか、異形やとか…頭っから決めてかかるようなことは絶対したらあかん、て」
笑顔できっぱり言い切るみことに、道満はそうかそうかと楽しそうに笑う。

「お主らはどうやら、あれに相当うまく丸め込まれておるようだな」
「人聞きの悪いことを言うな。私達は丸め込まれた覚えなどない、今は好きでここにおるだけじゃ」

それに…杏珠さまほど大きくないにせよ、『事情を抱えている』のはお互い様なのだし。

「今は、ということとは…いずれは出て行くのか?あれの」

「うるさい!そんなことはぬしの知ったことではなからうが!」

『今は』…なんて。

言ってしまった自分に動揺して、揚げ足を取られたことにもっと動揺してしまい、つい…大声で怒鳴ってしまったが。

ふと、冷たい柔らかい手が私の手を掴み。

みことは…優しい目をしてこちらを見つめていた。

腹を抱えて笑いながら裏戸を開け、転がるように去っていく…道満。
「では、またの!何か面白いことが起こったら、すぐにわしにも知らせるのじゃぞ」

「知るか!とつと出て行けこのくそじじいが!」

さらさらと降る雨の他、何も音を立てない…静かな夜がまた広がる。

「みこと…」

「…なあに？」

「その手…いい加減に離さぬか？」

「あら、堪忍」

くすぐったそうに笑って立ち上がり、おやすみ…とみことは部屋に戻って行った。

波立った心を沈静化してくれた、彼女のぬくもりの残る手を…じっと見つめる。

なんだか……

今日はおかしな日だったな。

面白かったような気もするし…なんだか後味も悪い。気を取り直し、夢の日誌に視線を落とす。

『明日からは私も姉弟子になるのですから、瑠璃ちゃんの手本になれるよう、一層修行に精進しようと思います』

妙に鯨張った文章に、思わず顔が綻ぶ。

「まあ…良いか」

明日からは、あのちびがこの庭を元気いっぱいに駆けまわるのだろう。

『子供が好きだ』と…いつかあいつに聞いたことがあった。

自分が子供だからだろうと思ったが、無駄に喧嘩するのもなんなのでやめておいた。

そんなことも…今は遠い遠い昔のことだ。

立ち上がって、思いつきり伸びをして。

誰もいない庭に背を向け、私も寝室へと向かうことにする。

「しっかり休まねば…明日から、賑やかになるぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9732/>

近代お伽草紙

2011年10月5日14時57分発行